

ないことに気づいた。
だから言わせてくれ、君が好きだ。
君は俺に笑顔をたくさんくれた、勇気をたくさんくれた、
だから今度は俺が君に幸せを返したい。

えに行つた後に彼女に隠れてこっそりもう一組迎えに行つた。

「ニヤー、ちゃんと来れて良かった。途中で美結さんが迷子になりそうだったから焦つたよ」

「すみません私の元飼いが」

そう、ユキとクウちゃんだ。二匹も是非観てみたいと言うので招待した。二匹を抱いてこっそり楽屋に入り舞台袖から観るように考えた。

「今日は大事なお客さんは多いから気合い入るな」

「いつでも気合い入れとけよ」

「あ、すみません朝田さん」

——もちろん公演は大成。帰り道は美結に褒められ鼻の下を伸ばしている所を、こっそり後ろから付いてくるユキとクウちゃんに観られながら帰つた。そんなのがとても幸せに思えてこのままの形でずっとありたいと心から思う。しかし思うようにいくわけもない。

「あ、武志くん言うの忘れてただけだね、明日で実家に帰るんだ……」

「え、なんで言ってくれなかったの」

「ごめん、なんか言い出せなくて」

俺はいきなりのことと思わず分をわきまえなかった発言を後悔した。

「俺こそごめん、普通に考えて部屋も引き払わなきゃならないしそうだよ。ってか俺に言う必要もないことだし」

「そんな風に言われると悲しいな」

彼女のその一言に俺の想いを全て言いたくもなかったが俺はまた言えなかった。ネコの様に自分に素直にいられたらどんなに良い事だろうと後悔をしながら彼女と別れ家に帰つた。

「武志さん、良かったのですか?」

「あ、そっかユキもクウちゃんも後ろで見てたのか」

「私なら好きな相手が旅立ってしまうなら何も考えず追いかけますけどね」

「やだ、クウさんったらかっこいい……」

この二匹の夫婦漫才にもならない愚劇に少し心を打たれた。しかし人間は好きなように便利に生きられるようになった代わりに、自分自身の気

持ちには正直に生きにくい動物なんだと彼らに言いつつ自分にも言い聞かせた。

「そうですか、難しいのですね人間とは」

「もうそれはネコ以上に難しいよ」

「もしかして武志さん、失礼ですけど怖気づいてますか?」

「え? なにに?」

「美結にフラれると」

「違うよ、言つたところで彼女は行つてしまふから」

「ネコの私としてはその言い分は理解できませんね。彼女はまだ行つていないでしょう、なのに何故言えないのですか。それはあなたがあなたの気持ちに素直になつてないだけですよ」

俺はどこかの安い映画のようにネコに諭されて美結に会いに飛び出た。

「……やつと行きましたね」

「クウさんもう私たちも行きましょう。今の内にここを出しましょう」

「やはりそうですね。彼のあの素晴らしい踊りなら、絶対に留学を決めるでしょうから。別れは誰にでもありますから。それが早いか遅いかだけですな」

——「どうしたの?」

「いきなり来てごめん、今忙しい?」

「大丈夫だよ、準備はだいたい終わつてるから」

「じゃあちょっといいかな」

本当は初めて出会つた時に分かっていたんだ。

でもなんでかな、とても遠回りをしてしまった。

誰かのことを想っている横顔でも素敵だったから、ガラス越しに眺めているだけで良かった。

それでもあの時の気持ちは確かなもので、こうやって変わらずにあったんだ。

そして手に入れてすらいない君を失いそうになって、言わなくちゃなら

「大丈夫ですよ！ お金の話は別として。行くしかないでしょ！」
 「さすが武志だな。よっしゃ、詳しい話は練習の時にでもするか。とりあえず偉いおつさんには行くことで返事出しくわ」
 俺はあまりに嬉しくて電話で大声で感謝の言葉を叫んで膝に頭をつけてお辞儀した。

「武志くん……？ どうしたのそんなに良い事あったの？」

「良いなんてもんじゃないよ！ 留学のチャンスだよ！ しかも美結と同じ国に！」

そうそのスクールは地域はほんの少し離れてるけど美結と同じ国のスクールだった。

「え……ほんと！？ それ本当なの！？ ドッキリじゃないの！？」

「これでドッキリだったら俺は人間不信になるわ」

街中、カフェの前で俺たちは人目を気にせず手を取り合って盛大に喜んだ。

「じゃあ……予定変更！ 買い物さつさと済ましてお祝いしよ！ 武

志の夢の留学祝い！」

まだちょっと気が早いけどとても嬉しくて俺は大きく頷いた。「それに美結と離れなくて済む祝いだし——あつ」

「ちょっと武志？ 心の声漏れてるよ……？」

耳まで真っ赤になった俺を見て美結も少し赤くなった。俺は自分の気持ちを抑制するのに専念していた——。

——心の原動機——

俺は翌日から人が変わったかのように活力的になった。まずは目の前の課題——今週末の公演に向かって真剣だ。不幸中の幸いなのか俺が登板を頼まれた作品は二つで、どちらも過去にやったことのあるものだった。というか朝田さんもそこを分かかっていて俺を指名したのだと思う。だからと言って気を抜くことはなかった。苦手意識のある個所、細かい

所の完成度などをこんこんと詰めて練習していた。夢への道が一つ開けて、これまでの経験、これからの経験、全てが大事だと俺は改めて実感しようとしている。この練習も公演も次に控えるスクール入団試験に繋がるから。美結も俺の留学のチャンスに加えて、この公演も観ることができ喜んでくれていた。

そういう訳で今日は朝から過剰気味に練習して時刻は夜の九時になってしまった。ユキをほったらかしなので怒られるかと思いつながら家に着く。

「ただいまー、ご飯忘れずに買ってきたよ」

「おかえり武志」「武志さんお帰りなさい」

「あれ、ご飯遅いから怒ってるかと思った」

「昨日あんな嬉しそうに話聞いたら遅くなるのはわかってたよ」

なんだか母親に言われたように気持ちになつて柔らかく思えて嬉しかった。

一人と二匹で仲良テレビを見ながらご飯を食べる。ユキが入団試験のことを聞いてきた。

「それで朝田さんとやらと詳しい話はしたの？」

「あ、したよ。とりあえず試験は六月なんだって。もちろん現地でね。受験する人数が多いから試験は三次審査くらまでやって絞るらしい。あとの細かい話はまだ追々だつてさ。向こうのホテルとか調べとこうかな」

「二次試験通るならね」

なんて皮肉も言われるが応援してくれているのもわかっている。

——ラストダンス——

公演の日はすぐ訪れた。しかし俺は今までにない完成度を自負して楽しんでみた。いつものように早めに準備をして本番に備える。美結から会場に到着したと連絡があり、出番まで時間があつたので会場前まで迎

だ。もつとも俺は気にしていない。それを気にしてお互いが勝ちを望むとただただ待ち合わせが異常に早くなるだけだからである。今日は彼女が引越すのに在るものを買いに行く約束だ。ここ最近今日みたいな引越すのの買い物が多し。しかし今までに彼女が買った物を考えると今日あたりで最後になりそうさ。

「今日はなに買うの？」

「そっだなー、なんだっけ。忘れた」

「じゃあどっかカフェでゆっくりでもしたら思い出すさ」

もうすっかり美結の扱い方がわかっていた。この彼女の物忘れは思い出せないのか思い出そうともしていないのかわからないが天然なのはもう間違いない。レジでお金を払って商品を忘れることなんかは当たり前で、この間なんかは喋っていたらレジを通るのを忘れて危うく捕まるところだった。

「あ、そうさ出発の日が決まってるね、それがけっこうすぐなんだ」

いきなりの伝言に俺は少し戸惑ったが慌てずにゆっくりと返事をできた。

「そっか、じゃあもう一日デートとかできないね。いつ頃に決まった？」

「二週間後になった」

俺の勝手な予想、むしろ希望よりも早い出発で俺は気を落として若干の重たい空気が流れそうになり、慌てて話を切り替えようとした。

「あ、あれ語学本買ったという方がいいんじゃない？ 現地の言葉話せるの？」

「そっだね、前にも買ったんだけど分かりにくかったしまた買おうかな。あーあ、英語なら話せるのに……」

「まあ向こうは英語も普通に通じるみたいだし焦らなくてもいいんじゃない？」

英語話せるんだ、と失礼な突っ込みは頑張つて飲み込んだ。

「武志くんは進路どうなったの？」

「決まってるんだ、このままじゃニートだ」

「それはダメだよ！」

「というのはさすがに冗談であの劇団にそのままお世話になるかな」

「なんだ、びっくりした」

「美結は向こうでの事はどうなった？」

カフェでゆっくりと美結のこれから、俺のこれからの話をしていたら彼女は案の定物忘れから脱却した。話を続けながらカフェを出ようと重たい木製の扉を開けたところで替えたてで聞きなれない着信音が鳴る。朝田さんからだ。この人からの電話は良いニュースのイメージがないので少し応答するのに躊躇ったが出演の依頼なら嬉しいので恐る恐る出た。

「おー武志か久しぶりでいきなりなんだけどよ——」

「待ってください。良い話か悪い話か教えてください」

「なんだお前、俺からの電話は良いニュースしかないさ。しかも二つだ」

全く持つて信用のならないこの人は信用ならない。

「まずは一つ目はよ、来週の公演手伝ってくれや、本番が土日だから

明日から練習来い。いきなりだからギヤラは弾む」

待つて、土曜つてあと五日後じゃないか。もう練習つて言うよりハールだろ。ギヤラは弾む？ それなら何も問題はない。

「んで大事なのは二つ目なんだけどよ、聞いて驚け。この間の公演を観に来た客から連絡あつてさ。あ、この客つて言うのが特別席で見た奴で、簡単に言うとお偉いさん」なんだけど。その人がソロの演目観てお前のこと気に入ったらしくてよ、色々聞いてきてお前が卒業間際で進路決まってるないアホ大学生だつて言つたら、なんでも海外のスクール入試の推薦枠余ってるからどうかって言ってるんだ。それでそのスクールつてのがあのけっこう有名……あれなんて名前だつて、えつと、あつそっだあそこ——」

朝田さんからの口から聞き覚えのあるスクールの名前と最近聞きなれた「国」の名前が出た。俺は一瞬頭が真っ白になって体と顔が固まるくらい嬉しかった。真っ白だったパズルが一瞬で完成した。

「まじですか！？」

「まじだよ、つて言つても推薦枠貰えるだけで旅費も入試料金も全部自腹なんだわ。それにけっこう倍率もあるみたいだしな。やっぱきついかな？」

私は死を選びたくもありません。だから言わせて下さい。私はあなたが好きです。いつもあなたのことを考えて胸が恋しくなります。そしてあなたが許すなら私とこれからはずっと私の傍に居てください」

私は悲しくも嬉しくて涙が滲みそうだった。しかし最後の言葉の意味がわからず、滲んだ目で首を傾げてしまった。

「すみません、やっぱりわかりにくかったですか。えっとつまり、私は美結の下を出て、野良になります。だから毎日こうして今までのように、いや色んなことをこれから私と過ごしてくれませんか、ずっと」

まだその丁寧な説明を聞いても少し理解するのに時間を要した。理解した頃には涙の色も変わり、今にも消えてしまいそうな私のところは明るさを取り戻した。

「はい、喜んで」

「本当ですか？ 良かった。それは良かった。ありがとうございます」

「もう、とつてもわかりにくい告白でしたよ、それに野良だなんていきなりでびつくりしました」

「いやー家で何度も考えてきたのですがやっぱりだめでしたか」

彼のそんな姿を想像するだけでも愛らしく思えた。

「これかもよろしくお願いします」——「はい、こちらこそ」

三日月の光がいつもより少し輝いて見えた。

——幸運の在り処——

「ニヤー」

「ニヤー」

「ニヤーン」

「ニヤニヤーンニヤー」

「うるさく」

ついこの間俺の家にネコが増えた。クウちゃんだ。それはいいのだが、いや世話は増えるし食費も倍だから良くはないが、とにかく人の家でい

ちやいちゃしないで欲しい。今までは外で会っていたのが家に住みついてからというものの夜中に話を、しかもネコの言葉ですから最近寝不足になってきた。事の発端は美結からの相談だった。それはクウちゃんが帰ってこないという話だった。今まで朝までには帰って来てたのに二日も帰ってないということだった。俺はネコなんて放っておけば帰ってくるものだろうと思っていたが、彼女があまりにも心配そうな顔で話すのでユキに尋ねてみたら聞いてもないクウちゃんの愛の告白のセリフまで延々と聞かされた。それでクウちゃんと話して美結が心配してるからと説得したものの彼の熱意に負けたのであった。と、そこまでは良かったのだが問題はそこからだった。何を思ったのか、いや一つしかないけどユキが家にみんなで住めばいいと言い出したのだ。クウちゃんもそれは名案だと乗っかり止めるタイミングを見逃した俺は今の状況に至る。もちろん二匹の為に美結には内密にしている。

「なんだ武志その眼は、羨望か嫉妬か」

「ネコにそんなこと思うか」

しかし内心ほんの少し羨望の気持ちはあったかもしれない。同じように悩んでいた筈のユキが今ではなんとも幸せそうにしている。それにあんなユキ見たこともない。嬉しいような悲しいような。愛娘が彼氏を連れてきたら父親はこんな気持ちになるのだろうか。そんな二匹を見て、特にクウちゃんの男らしい所に俺も考えさせられる部分があった。おっと家を出る準備をしなくては。

「あれ、武志今日も美結さんと会うの？」

「ちよっと買い物付き合っつて言われて。遅くなるかもしれないからご飯置いとくからな」

「いつてらっしゃい武志さん。美結によりしくお伝えください」

「どう伝えるって言うんだよ、クウちゃん自分で言えばいいのに」

「それは考えておきますね、お気をつけて」

全く素晴らしく紳士なおかげで一つも憎めないネコだ。

——「お待たせ武志くん、今日は私の負けか」

最近美結は会う時にどちらが先に来ているかで勝負をしているみたい

いので」

私たちは少し沈黙となった。彼がその沈黙を破って冷え込む前に帰ろうと言うので頷き返して家まで送ってもらった。

「次は、いつ会えますか……?」

「それでは明日、また明日お迎えに上がります」

彼と約束を交わさなければもう会えない気がして初めてそんなことを言ってしまった。

私は家に帰り武志にこの事を話した。案の定この話で頭を抱えていたらしく、恐らく私と近い心境なのだろうかと思う。

「美結さんはいつ行くの?」

「大学は卒業が決まっているから来月には行く予定なんだって、今は準備で慌ててるよ」

「クウさんがどうなるか聞いている?」

「それなら実家に預けるって言ってたかな、ネコを飛行機に乗せるには手続きが間に合わないんだって」

彼女の実家がどこかは知らないが、一人暮らししてることとはネコが行けるような距離じゃないということとはわかる。

「どうするの武志は」

「どうするもなにも、ただ見送るしかないよね」

「美結さんのこと好きなんじゃないの?」

「好きでも嫌いでも彼女は行っちゃうんだって」

少し含はにかんでそう言うのは強がっている。もしかしてクウさんもそんな気持ちだから何も言って来なかったのだろうか。なにを言っても行ってしまうならなにとも言わないべきなのかもしれないと私も少し考えた。

——言葉で伝えよう——

美結さんの話を知ってからあつという間に時間は経ってしまった。武

志は学校が冬休みに入ったことで美結さんと頻繁に会っているようだ。しかし彼女と会った帰りは決まって思い悩んでいるようだ。これも恋というやつなのだろうか。なんて人の恋について言っている私も同様にクウさんとのことで悩んでいる。私も武志と全く同じ状況でどうすることもできずにただ時間が流れていくのを見ているだけだった。

「はあ」私と武志は同時にため息をつく。もう思い通りにならないのなら、いつそのこと全てをやめてしまおうかと思っているとコンコンコンコンツツと窓が鳴る。最近はい前より会う回数が増えた気がする。

「今の内にたくさん良い思い出作っとけよ」

と武志が柔らかに声を掛けてくれた。私は初めて武志に目をぎゅつと閉じた。

クウさんも今日もいつも通りの様子に見えたが、顔合わせでもいつもの挨拶をしないとこだった。なぜかそれだけで空気が今にも張り裂けそうな感覚になる。なにか大事な話がある雰囲気口を締め付けられ静かな時間が鳴っている。私は耐え切れなくなり口を開けたが声を出すのに少し時間が必要だった。

「どうかしましたか? いつもと様子が違うようですけど……」

「……今日は、お別れすることをあなたに伝えたく思ってた来ました」

来ることのわかっていた時間。わかっていたはずなのに考えることをやめてしまっていた時間がきた。もうこうなつては今から聴く言葉、これからのことをただ受け止めるしかない。

「そうですか……寂しいです。今日で最後になりますか?」

「私もとても寂しく思います。最後になるかなんて今からのことはわかりません」

これからのことは誰にもわからない。なんて少し希望を感じさせるような彼の優しい言葉が今とてもひどく辛く思えた。

「でも私は決めたのです。ネコは気まぐれな生き物ではありませんが、その気まぐれさにはいつでも信念があります。それは自分の気持ちに素直でいることです。このまま私がどこか遠い場所へ行ってしまうことになれば、それは私の気持ちと相反してしまうことになります。それでは私の気持ちが死んでしまいます。この気持ちが死んでしまうくらいなら

「それで、落ち込んだ彼女を元気づけようと成り行きでデートをし彼女の家に泊まったらしい。」

「でも美結さんはまだ別れを済ましてないんでしょ、なんて不埒な」

「人聞き悪いこと言うな、ただ励ましたかっただけだつて」

「良いように言っているが傷心の隙につけこむあくどい手法ではないのか。美結さんも美結さんでどういふつもりなのだろうか。彼女の気持ちはどうなのか気になるところもあるが今日は存分に武志をこき使って恨みを晴らそうと思う。」

「武志、背中かゆいんだけど。あとまぐろ食べたい」

「ねこじやらしに弄ばれながら偉そうに言われてもな」

——そしてもうすぐで二月にもなろうかと時に大きく話が動き出した。

——告白——

武志が美結さんの家に泊まってからというもの二人は以前にも増して仲が良くなったようだ。武志が言うにはあれからすぐ美結さんは彼氏と別れたそうでもう不埒ではなくなった。それからというもの暇が合えばえすれば会っているようだ。武志は自分の気持ちを認めていた。「こんなに本気になるなんて五歳の時に保育園の先生に恋した時以来だ」と言っている。そして武志からの話を聞いている分にも美結さんも少しはその気があるみたいだったが事はそう上手くいかなかった。それは武志が美結さんからの連絡で出かけて帰ってきた直後に私は知った。

「あれ武志早かったね、ご飯大目に用意していったから、また泊まるのかと思つてたよ」

私が少し皮肉をこめてそう言うが思うような反応がなかった。彼の顔をふと見ると明らかに何かあった様子であった。告白の時機を焦って彼女にフラれでもしたのかと聞いてみると

「ちよつといきなり過ぎてまだ整理できてないんだ」

と答えるだけでそれ以上を話さなかった。私は別に武志が美結さんにフラれたとしても驚くことはないと考えるが、彼がここまで上の空な様子を初めてみるので気になっていた。そしてその理由はクウさんから聞くこととなった。

半月が空に光はじめた頃にクウさんはいつものように窓の向こうに姿を映した。彼が窓を四度叩くのは迎えに来たという合図で、私は武志に一言かけて窓を開けて行つた。

「こんばんは、今日は少し暖かいですね」

天気気温の話で挨拶するのが彼の癖である。そして私はこうして彼と月を見ながらお喋りするの癖になつてきていた。最初は堅苦しくて疲れるネコだと思つていたが、堅苦しい言葉ながらもジョークも言つてくれるので慣れてきた。慣れた途端に彼と会うのが楽しみになつてきている。しかし一つ不満を上げるとするなら、いつまで経っても告白をしないのである。ポーカーフェイスのようにしているが内心はどうなのだろうか。と、そこでクウさんから美結さんの話、つまり武志が悩みの種を聞いたのであった。

「最近、武志が美結さんのことで悩んでるみたいなんです。クウさん何か知りませんか？」

「そうですね……私も無関係ではない話で非常に言い難いのですが——」

彼の言葉は私に言い知れぬ不安を与えた、私は黙つてその続きを待った。「美結が彼氏と別れたことはご存じで？ それに加えて彼女、卒業を待たずに海外に行くことが決まったのです……」

あまりに唐突な事で私は素直に驚いてしまった。美結さんと特段関わったこともないが、彼女が海外なんて突然なことだ。

「詳しい話は私もわからないのですが、フィギュアスケートを海外でやるとかみたいで。彼女自身も悩んでいる様子ですが貴重な経験だから行きたいと決心しているようです」

「あなたは……クウさんはどうのですか……」

「まだわかりません……私の事も含め、美結はまだ整理ができていな

「安心してください、私もご飯食べたら出かけるので」
 彼がそう言うて俺の膝元に上がって丸くなるので終始撫でていた。

「お待たせ、簡単なのでごめんね」

「お、ラザニアとボルシチ？ どっちも俺の好物だー」

しかし何故この二つの組み合わせなのかその意図がわからない。そして美結はクウちゃんにも焼き魚、しかもホウボウをお皿に盛っていた。

「いつもネコのご飯も手作りなの？」

「うん、クウちゃんね何でも食べるから作り甲斐あるの」

何でも食べるつても気になるけど、なぜあえてホウボウなんだ、小骨多いけど大丈夫なのか。そんなことを考えながら食べていたらその手の止まらない美味しさで少し納得したかもしれない。

「ごちそうさま、めっちゃうまかったびびった」

「本当に？ 良かった、無言で食べるから不安だったよ」

「おいすぎて色々考えてたら喋る暇なかった」

「そうだ、お酒あるけどちよつと飲む？」

俺はあまりお酒は好きじゃない。洋酒は好んで飲むのだが日本酒や焼酎が苦手である。しかし彼女がそう言うて持ってきたのはジンだった。それに加えクラックドアイスにトニックウォーター、メジャーカップ、バースプーンも出してきた。

「すごい本格的だね……」

「カクテル好きが高じて作るのも趣味になっちゃった」

カクテルを作るその慣れた手つきはかっこよくて、何杯飲んでも味は均一にできていた。それを見たいが為に思わず飲み過ぎてしまった。

「武志くんすごい飲むね、もう二瓶空いちちゃったよ……気分悪いならベッドで休んでいいよ？」

しかしそういう美結は色んな割り方で俺以上に飲んでいる。そしてお言葉に甘えてベッドに腰掛けて楽な姿勢をとった。

「美結もけっこう飲んでるけど大丈夫？」

「ちよつと眠くはなってきたかな、もうこのまま寝ちゃお」

そう言うて彼女が俺の横に腰掛けてなにかゴソゴソとしているのが気になって振り向くと服を脱ごうとしている様に見えた。すごい直球で誘わ

れているかと思ったが、よく見ると目が据わりこんでいた。

「ちよつと美結どうした、一回止まれ」

「どしたのお武志くん、もう寝るから武志くん泊まってく？」

「いつの間になんかに酔っぱらってたの」

「酔ってないってえー」

俺は姉四人という環境で育ったので裸くらい気にしないのだけど、明日の彼女は気にするだろうから布団を被せてその中で脱ぐように言った。そして彼女が寝付くまでうわ言に生返事を返していたのだがいつの間にか俺も寝てしまっていた。

——本能——

「おーい、ユキさん？」

「いや、今テレビ見てるから話しかけないで」

私は今とても怒っている。この怒りの矛先は武志である。なぜなら彼は昨日帰って来なかったのである。お昼前に美結さんとカフェに行つてくると言うて出掛けたまま、夜になっても帰って来ず朝になって何事もなかったかのように平然と帰ってきたのだ。クウさんが何かわからないうが焼き魚を持ってきてくれてなかったら餓死しそうなくらいお腹が空いていたというのに。それにしてもあの魚見た目はともかく美味しかったな。そういう訳で私はずつと機嫌が悪く武志とまともに話していない。武志はあの手この手で私の機嫌を取ろうと必死だ。次はどこから出してきたのか、ねこじやらしぐをにやつきながら振っている。ネコの機嫌を取るのにそれとは武志らしく短絡的だ。いくらネコでも機嫌が悪い時にそんなものにいちいち反応なんかする訳な——

「お、釣れた」

「くそう」バシバシッガブッ

と、いうことで武志は私に世間話なのか相談なのかはわからないが美結さんのことを色々話してくれた。美結さんは彼氏との別れを決意した

少し息が切れていた。

「あ、見えてきた！ 思ってたより人いないね」

「ほんとは、空いてて良かった」

まずは小屋に入って腰掛けて休憩する。小屋の中ではサル用の餌を袋売りしていて、小屋の中から網越しにサルにあげられるようだ。

「いっぱい売ってるんだね、私はリンゴの餌にしようかな、武志くんは？」

「俺もリンゴ考えてたけど違うやつの方がいいよな」

俺は落花生を買って網まで近づいた。人の気配を感じたのか何匹かサルが網にへばりついて来た。すぐ目の前まで来たサルたちは網の隙間から手を差し伸ばし餌を要求している。その手は小さくいが人のそれよりも逞しく感じた。真っ赤な顔についた黄色い目はとても鋭い眼光だった。俺は目の前まで近づいてじつくりと見ていたが、美結は怖がっていたようだ。

「武志くん、怖くないの？ なんかみんな表情怖いんだけど……」

「なんか地元の友達に似てて親近感湧いてるんだ。というか美結の方にすごい集まってるね……」

サルでも人間でも同じなのか小さいサルから大きいサルまで多くのサルたちが美結の前の網

群がっていた。その群がる数と素早い動きはさながらこの間観た映画の『ドーン・オブ・ザ・デッド』のようだった。彼女が逃げ腰で恐る恐る餌を近づけると一匹のサルが手を伸ばしそれをとった。しかしその瞬間他のサルたちがそれを奪おうとして、どれかのサルが食べてしまうまで網の外は一時修羅場となった。

「そ、そんなに喧嘩しなくても、い、いっぱいあるよー？」

「す、すごいね……さすが美結というべきかな……」

そんな滅多に見れないであろう光景を見て俺たちは山を下りた。

「次どうする？ お腹空いてない？」

もうお昼も過ぎていたので気を利かして聞いてみると彼女はまだ少し遠慮気味だった。

「ちよっとだけ空いてるかな、でもまだ大丈夫だよ」

「ちよっとか、じゃああっちの通りに戻って食べ歩きでもしよか」

また橋を戻り露店が多い通りを歩く。メンチカツ、肉まん、アイスクリームなど選り取り見取りであった。美結は何度も頑なに断ったが、食べ歩きでは俺が奢った。

「いいつてば、お金なら大丈夫だって」

「今日はお姫様のご機嫌を取りたい気分なんだよ、俺のわがまま聞いて？」

「あ、ありがとう……ごさいます……」

歩いて食べて歩いて最後は足湯を見つけたので足の疲れを癒した。彼女は背中を曲げてお湯を掬っては落として遊んでいる。

「けっこう遊んだね、さすがに疲れたでしょ？」

「楽しくて疲れとか忘れてる」

彼女は今のところ落ち込んだ様子もなく楽しんでくれたようで俺も満足感に包まれた。もうすっかり夕方だったので二人は帰ることにした――。

「わざわざ送ってくれてありがとう、家の方向違うのに」

「歩くのは好きだから大丈夫だよ」

「せっかくだしお礼もしたいからご飯でも食べていく？」

帰ってももちろんご飯はない、久しぶりに誰かの手料理を食べられると思うと嬉しくて快諾した。というかクウちゃんがいるんだよな、さてどう接するべきなのか……

「それじゃあお言葉に甘えてお邪魔します」

「適当にくつろいでて、ばばっと作ってくるから」

俺は美結の言葉の通りテレビの向かいのソファに深く座りくつろごうとする。

「こんばんは、武志さん。お久しぶりですね」

そのソファにはクウちゃんが居た。とても小さな声で俺に話しかけてきて俺は驚いて普通に返事してしまった。

「あ、お久しぶりですね」

「え？ 武志くん何か言った？」

俺が焦って何も言っていないと返事するとクウちゃんはくすつと笑った。そしてまた小声で話してくる。

を思ったりをしたが美味しいカプチーノがあるか楽しみにも思っている。一駅で電車を降りて少し歩いて路地に入ると開いているのか閉まっているのか分からないようなカフェがあった。こんな隠れ家みたいなところよく見つけたなと感心したがネットでそれなりに有名ならしい。席に着いて一応メニューを見てカプチーノがあることを確認するだけだ。女の子は選ぶのに時間がかかるから俺も悩んでるフリをしようと思ったが、彼女もすぐに決まったようでウェイターを呼んだ。

「カプチーノで。あっ」

コンクールで初めて出会った時の様に二人の言葉は同じだった。

「武志くん真似したでしょ」

彼女は可愛いしかめっ面をした。それから仲良くカプチーノを飲みながら大学のことや趣味や恋愛などを話していた。思えばお互いに詳しい話をするのは初めてでお互いに似ているところが多いと感じた。ネコの好きな所、暇な時の過ごし方、恋愛観、果てはカプチーノを飲むペースまで同じだった。確か心理学の授業でこんなのを「類似性の法則」とか言ってたか。しかし似ているからどうとかではなく、彼女には初めて会った時から不思議と好感を抱いていてとても話しやすかった。それは恐らく彼女もそうなのだろうと思う。

そしていわゆる「恋バナ」になると彼女が俺を誘った理由が分かった。まずどうやら彼氏と別れたらしい。正確に言うともまだ別れてはいないが美結はもう別れを決意しているようだ。しかし困ったことにその原因が俺だとかで。

「いや、武志くんは何も悪くないんだよ。私がこの間の公演を見てからつい武志くんの話ばかりになっちゃって。それでまた喧嘩になったんだけど、もう彼のそういう子供みたいな所が嫌になったんだ。確かに私も悪いかもしれないけど、男の人にはもっとどっしりとして欲しいんだよね」

そうは言われても俺が悪いと謝ることもできない話なので、言い知れぬ罪悪感がある。そこで俺はとてもし落ち込んでる彼女を見て提案した。

「ちよっと電車乗ったら有名な観光スポットあったよね、行こうよ」

「え、いきなりだね。どんなところだった？」

「俺もあんまり詳しく知らないんだけど行けばわかるでしょ」
そう言っちょと強引だったかもしれないが彼女と本格的なデートになった。

—— 正しい甘え方 ——

当初の予定から大幅に変更して俺と美結はデートに来た。勝手にデートと言っちょもいいのかわからないが、周りはカップルばかりで俺たちも傍から見ればそう見えるのだろう。

「けっこう人も露店も多くて賑わってるな、なにしたい？」

そう美結に問いかけるが彼女はいきなりの展開について来れてないのか少し戸惑っている様子だった。

「美結に元氣出して欲しいから今日は美結のしたいことなんでも付き合うよ」

「えっといきなり言われても悩むなー、どうしようか」

それならまずは散策でもしながら考えることにした。大きな川を中心に露店や土産屋が立ち並ぶ通りを真っ直ぐ歩いてみた、橋を渡って川を越えるとまた露店があり川辺にはカップルたちが座り込んで仲睦まじそうに肩を合せて話しているのが目立つ。

「あの看板のモンキーパークって、なんだろう？」

美結が指差した看板は小さな山の頂上にある小屋や広場でほぼ野生の二ホンザルと触れ合うことができる施設であった。

「おサルさんと遊べる場所みたいだね、行ってみる？　なんか山の頂上って書いてあるけど大丈夫？」

「行ってみたい！　ヒール履いてきてないから余裕だよ、これでもスポーツしてるんだから大丈夫だよ」

山に登りはじめて十分くらい経っただろうか、山登りと言っちょもしっかりと舗装された道なので足元が悪すぎることもない。途中の山の中の景色もきれいで碎け散る日差しの中で美結も俺も喋りながら歩いたので

開演時間の三十分前には会場に着いた。武志くんと言われた通り受付で名前と身分証を見せたら入ることができた。少し着くのが早かったと思ったが、もう中にはちらほら観客が入っていた。テレビで見えるような豪華な特大ホールではなかったが、それでも立派な会場だった。指定された席に座り、本番前に悪いかと思っただが彼に連絡を入れておいた。

「もう会場に入ってます。頑張ってくださいね」つと、送信つと」

スマートフォンの音がならないようにして鞆に入れ、プログラム表を読んだり舞台の作りを見ていた。すると後ろから話しかけられた。

「お姉さん、お一人ですか？」

こんな所でもナンパする奴がいるのか、と思いつつ振り向かずにはプログラム表を見ながら答えた。

「はいそうですけど」

「よかったですら俺と一緒に観ませんか？ 横の席の人とは変わってもうからさ」

これはしつこく話しかけてきそうな雰囲気を感じたので一言びしつとやおうと眉間に皺を寄せて振り返ったら、そのナンパは武志くんだった。

「びつくりしたー、やめてよ一緒に観るものにも武志くんが踊るんじゃない！」

「ようこそ、ありがとうね来てくれて」

「こちらこそ招待してくれてありがとう。本番もうすぐなのにいいの？」

「すぐ戻るよ、美結の顔見て勇氣貰おうと思ってる」

本当に時間がなかったようで彼はすぐに戻ってしまった。本番前だからかいつもと違う雰囲気だった彼は素敵に見えた。

開演時間の五分前になり会場の照明が暗くなる。ステージにライトが浴びせられ全ての観客の注目が集まり、静かにはじまった。

——公演は素晴らしい内容で幕を閉じた。私は初めて公演を生で観た

けれどとても感動できた。フィギュアスケートをやっている身としても勉強になることが多くて大満足だ。武志くんから連絡があり、私は会場の中で彼を待っていた。

「美結お待たせ、どうだった？」

「すごい良かったよ、もう全部息も忘れて見惚れちゃった。特に武志くんのソロ、すごかった。世界で一番きれいで高いジャンプだった」

「それは言い過ぎ、でも良かった、ありがとう。もう帰るの？」

「特に予定はないから帰るかな」

「それならちょっと待ってて、着替えてくるから一緒に帰ろ」

そしてもう一度彼を待ち一緒に会場を後にして、お喋りをしながら彼と帰り道を歩いた。緊張が解けたからなのか彼は本番前の雰囲気から、いつもの武志くんだった。しかし今度は私がいつもと変わってしまったようである。なぜだか恥ずかしくて彼の顔を今までのように見ることができない。彼の顔を見る度に舞台上の彼の姿を思い出してしまう。

「どっかでお茶でもしていく？」

私もちょうどそんな気分だったのだがいつもの調子で喋れない気がして泣く泣く断って帰った。

家に着いてベッドに腰掛け思わず呟いてしまう。

「ちょっとあれはギャップというのかなんというか、かつこよすぎたな」

——カウンタダウン・スタート——

ひとまず難関だった先の公演も終わり次のことを考えながらくつろいでいる俺だった。今日は珍しく美結に遊びに誘われた。遊びと言ってもオシャレなカフェを見つけたからお茶でもしようという誘いだ。オシャレなカフェということなので、一応粧し込んで待ち合わせ場所の最寄の駅の前まで行く。駅に着くと彼女は先に待っていた。

「ごめん、待った？」

「ううん、私も今来たところ。ってなんだかドラマみたいだね」

少し照れながら言う彼女と一緒に俺も照れながら電車に乗り隣町に向かった。電車乗ってお茶飲みに行くなんて女の子ってすごいなと皮肉

出て行く。

やっぱり本番のことで気になることが多い。腹なんか括ってる暇があるならやっぱ練習した方がいいのだろうか。でも本番直前に練習して失敗しまくって、その感覚しかないまま本番に臨むなんてことになったら最悪だ。それならいっその事今の及第点のままでもいいんじゃないのか。俺としては俺が理想とする到達点まで持っていきたいけど、観客としてはちゃんとした仕上がりを観たいのは当然のことだろう。失敗こそしたものの、このチャレンジ精神を認めて下さい。なんて言うのはアマチュアまでの話でお金を頂くからにはプロ意識を持つのが当たり前だ。しかしプロ意識を持つからこそ更なる高みを目指して挑戦し続けるのも大事なのかも。だが時として現状を維持し続けることの方が重要で困難な場合もあるだろう……

「あー！ もう！ 考えてても埒が明かない！ ユキ俺はどうしたらいいんだ！」
といきなり叫んでみたものの部屋はとても静かで、くだらないテレビの音だけが流れていた。

「あれ、あそここの窓が開いてるってことは、いつ間に出てったんだ」
一人で考えるのに飽き飽きして愚痴でも言えば「そんなに講釈をたれてる暇があるならさっさと練習してこい」とでも一刀両断されたかったのだが、なんだか空しい気分になってしまっただけだった。

「我ながら今の脳内ユキはいい出来だったな。なんだか本当にユキに言われた気がしてきたから練習でも行ってくるか。朝田さんに電話してスタジオ頼んでみよーっと」

——あの方は踊り子——

さていつもより少し早い朝、時間は違えどいつものルーティーンは崩さない。いつもと違うのは時間とユキがまだ寝てるということだけ。ユ

キの普段の憎たらしいところからは想像できない可愛い寝顔を見られるなら、これからも少し早起きするのも悪くないかもしれないと感じた。なぜ早起きかという今日は俺のソロ演目が含まれた公演の本番の日である。長い間慌てて練習に練習を重ねた結果、完璧とは言えないが俺の理想の一手前までは近づいた実感を握りしめることが出来てこの日を迎えた。

「それじゃあ行ってくるね」

すやすやと眠るユキの額に軽く口づけして家を出た。

「朝田さん、おはようございます」

「お、武志か。相変わらず入りはえーな、団員のやつより意識高いよなお前って」

「俺は他人より準備がかかるだけですよ」

「どうだ卒業したら正式に入団する気になったか？」

「またその話ですか？ 俺は海外行ってみたいんですけど、ギリギリまで諦めませんよ」

「まあいつでも来いよ、もうここはお前の家みたいなものだからよ。じゃあ軽くリハーサルはじめながら全員揃うのを待つか」

相変わらず朝田さんの優しさには感謝しかない。まずは目の前のことに全力を出すしかない。俺は着替えて体を動かす。まだ空気の冷たい舞台に立って気づいた、朝ご飯が少なかつたからか今日はいつものより体を軽く感じる。とても静かで深い呼吸の音が自分でもはつきりと聞こえる。指の先、足の先、全身に流れる血の速さを感じられる。うん、とても調子が良い。

朝いつも通り起きて、爪とぎをしながら大きく伸びをした。少し寝ぼけ眼ながら武志にご飯を用意させようと思っただけはなかった。

「あ、今日が本番って言ったか。武志のことだからなんだかんだ大丈夫だろうけど、ちょっと心配だな」

神頼みはあまり好まないけど、この間の出来事を思い出した私はせめて見守ってあげてくださいと思いを込めておいた。

「それでいいのだよ、神とはそういうものだ。決して浅はかな願いを乞う相手ではない」

「お願い事でしたらダメだったんですね」

「するなどは言わんが、願いと己の力ではどうすることもできない事を乞うものじゃ。しかし人間は己がだらけたいが為に神に甘えているのだよ。世界平和を願うのなら人が大方死ぬべきだということだな」この神様はひとつひとつの話が長い上に話の深みがあり過ぎて何を言っているのか理解できない。恐らく根本的な死生観や価値観が違うのだから。

「なんだ失礼な奴だな。神と生き物が違うのは猿でもわかることだろう。わからずともこの声を聴いておくだけで良いのだ」

「本当にあなたが暇をしていること以外なにもわかりませんが、ありがとうございます」

「構わんよ、お前は気に入った。お前が死す時はここへ来ればいい。死ぬことなんて言われてもまだまだ若い私には遠い話のことで、そんな先まで覚えていられるのかわからなかった。

「覚えられずともその御魂はわかっている。なにか悩み事があればいつでも私に語りかけると良い、助言だけならしてやろう」

「語りかけるって、どうやって?」

「先程のように祈る形で良い。私の名を呼べ、名は――」

「ユキー、どこだー次いくぞー。あ、こんなとこにいたのか、どうする先に昼ごはんにするか?」

「うん、そうしようお腹空いた」

「コンビニでいいよな、さすがにファミレスは連れて行けないからな」

「それはわかっているんだ。武志ってさ、神様っていると思う?」

「いるんじゃないかな? 子供の時に見たことあるし。すっげー綺麗な女の人だった」

「武志らしいや」

「ん? どういう意味?」

――心の中の君は――

公演本番の日が近づくにつれ、武志は前より落ち着きを持ちだしてきている。なんでも彼曰く、「もう逃げられないから腹を括ってどっしりと構える他ない」だそう。それは詰まる所、観念したようなもので。以前とのその態度の差はまるで切腹も辞さないかのようであった。

「本番直前だっというのに練習から帰ってくるの早くなったね。大丈夫なの?」

「もうここまで来たらできるとかできないなんて問題じゃない、やるしかないんだ」

「その心は……?」

「canかcantじゃなくて、just do it! なんだよ」

ご覧の通り内心はてんやわんやで焦りまくっているのだろう。

大変な武志には申し訳ないが、私は久しぶりにクウさんと会う約束があるのだ。昨日の晩に突然、私専用の玄関兼窓に見覚えのある紳士的な姿がうつすらと見え、まさかと思いきり開けてみると、美結さんの帰省が終わって戻ってきたクウさんだった。彼は「明日、月明かりと共にあなたをお迎えに上がります」とだけ言い残してすぐ去ってしまった。新月の晩で辺りはいつもより暗く、彼の顔がはつきりと見えなかったのがなんともロマンチックだった。そんな訳で武志を心配する気持ちも微かにあるが、申し訳ないけどクウさんのお出迎えを心待ちにしているそんなことはどうでもよかつたりする。すっかり恋に落ちてしまった私であつた。

とかつらつらと言って考えていたら彼の鳴き声が聞こえた気がした。慌てて窓を開け外を確認すると、三日月と彼がロマンチックに私を出迎えてくれた。

「お待たせしました。こんな夜分に失礼かもしれませんが、良い月ですので少し夜風に触れて見てみませんか」

「はい、いいですね」

武志はぼーっとテレビを見たままだったので邪魔しては悪いからそっと

「それで今からどこに向かうの？ 神社っていっぱいあるけど」

「神社が四つほど集まっている所があるんだけど、三駅ほどしたら乗り換えてまた三駅ほどしたら降りてちよつと歩くかな」

「ちよつと遠そうだね」

しかし初めての電車というのと、個人的に神社が好きだということもあり全く苦ではない。神社のあの独特で荘厳な雰囲気はとても好きだ。それはどんなに古く寂れて忘れ去られたような神社でも変わりない雰囲気を持つている。

途中やはり好奇心な目で多くの人が寄ってきた。写真の音もよく鳴り響いていたが武志は気づいていないのか肝が据わっているのか行先まで一切動じなかった。

「着いた、まずはここからだな」

そこはあまり人気のない場所だったがとても歴史を感じられるものだった。武志が言うには広大な敷地の中に神社が四つほどあるらしい。たしかに辺りは木々が生い茂っており、足元は砂利が丁寧敷かれ、少し歩けば雑居ビルが立ち並ぶ所とは思えないほど街の喧騒から隔離された場所であった。

「とりあえず写真撮って看板の歴史の話とか読みながら神主さんが居たらちよつと話聞いてくるから、ユキは好きにしていよいよ。呼んだらちゃんと来いよ、すぐ次のところ行くからな」

私はこくりと頷いて参道をてくてくと歩いて行く。まずはちゃんと手水舎で身を清める。と言っても柄杓は握れないのでちよいちよいと手を浸け口を濡らした。それから本坪鈴に吊るされた鈴緒の真下に着く。静かに座り姿勢を正し目を閉じる。初めましての神様だろうけど、新年のご挨拶を長々と祈っているとどこからか声が聞こえた。

「ネコがお参りとは驚いたな」

その声は薄暗い拝殿の奥から聞こえてきたような気がした。いや、正確に言うと声が耳に聞こえてきたというより、その声を感じたというのが正しいかもしれない。

「なんだ、気になるならこつちに来い。久しぶりに生きてる者と話したい」

得体の知れぬ声だが不思議と怖いという感情はなかった。お呼びならならお邪魔します。と好奇心に駆られ、扉をすり抜け賽銭箱を越えて拝殿の奥へと向かう。そこで目にしたのは薄暗い中で青白く光るネコのような姿をした、なにか、だった。

「そらネコでも少しは驚いてしまうわな。私は何だかわかるか？」

ネコではないのは見てわかる。安易に考えれば幽霊か妖怪の類だと思いかもしれないが、対峙してこそ感じられるのだろうか恐怖は芽生えない。むしろネコの姿を模ったその神秘的な青白い光は神々しさを匂わせていた。

「そうだ、人から神と奉られる者だよ」

私が口に出して答えなくても、それは、は会話を成した。

「神様ってネコだったの？」

「いや違う。神に形なんぞ無い。対面する者と同じ姿をしたり、人が願うものになったりする。人とは五感で生きておるからのう、姿形にこだわら過ぎるんだよ」

つまりネコの私と話す為にネコの姿で出てきてくれているようだ。

「そうだ、その方がお前も話やすいだろ」

「ありがとうございます。えつと……なにしてるんですか？」

「なんだその突拍子もなく面白みの欠片もない質問は。見ての通りなにもしておらんよ、神とは常に暇を持て余しておるのだ。元気のある若い奴らは人の信心を集めようとしておるが、古来の神とは人の信心で生まれたものではないからの、なにもすることがないのだ。強いて言うなら世を見つめているくらいかの」

なにを言っているのかあまり理解できないけど暇だということだけはわかった。じゃないとわざわざネコの姿でネコに話しかけてきたりしないだろう。

「それにしてもネコなのに信心があるとは珍しい奴だな。近頃は世の生活が豊かになった途端に、人ですら神を忘れてしまっているというのに」

「神社ってなんだか好きで、神様を心底信じてるとかではないんですけどね」

出しにおいでよね。それじゃあ良いお年を」

そう言い残して嵐のように去って行った。わざわざ何の為に来たのやら、電話で済むような話だったじゃないか。というか一方的に話すなら手紙でも良かっただろうに。災難にも近いようなことが終わりを告げ、俺とユキは安堵の気持ちで座り込んでいた。

「すいお姉さんだね……」

「だろ、あんなのが世人いるんだぜ……ネコ一匹であそこまで言われちゃやっぱ結婚なんて夢の話だろうな……」

「」愁傷様です……」

さあ気を取り直して赤い蕎麦でも食べよう。お湯を沸かしお湯を入れ待つこと三分。正直値段だけに惹かれて買った安い赤い蕎麦は予想外の美味で一人と一匹ははしゃいだ。なにも特別なことはないけれど、とても和やかな雰囲気だけで満足だった。

—— ペットの秘密 ——

先月に比べると暖かいようにも思えるが雪こそ降らないだけで相変わらず首が凝るような寒さだ。寒さと並行して武志のだらけっぷりも相変わらずで、ダンスの練習以外は寝転んでいるだけである。まだ練習は真面目にやっているだけマシなのかもしれないが、「アーリフトのタイミングが全然つかめねー。なんだよあの変則テンポは」とか、だらけながら言うのでなんとも言えなくなってきた。

「そんなことばやいてる暇あったらもっと練習してきなよ」

「わからないまんまやり続けても意味ないじゃん。それに今日はスタジオ使えないから一日暇なの」

「わからないからやるんでしょ。公園でも行ってきなよ、リフトの相手に美結さんでも誘ったらいいじゃん」

「お、ユキいいこと言うね。あ、でも絶対実家に帰ってるじゃん……」
こんな男とは絶対結婚したくないとひしひしと感させられた。さてか

く言う私の事情も美結さんが帰省しているからだろうか、クウさんからお誘いもなく姿を見かけることもない。この間までのさりげないアタックがあつたせいとか、寄せては返していく波のように少し心が奪われそうに気になりだしている。

「お、なんだ恋バナつてやつか？」

「だから勝手に心を読むな」

前にも一度あつたけどなんで心が読めるんだこのバカは。もしかしてこれ全部口に出してしまっているのか？とかくだらない妄想をしていると武志の携帯が鳴る。

「ん、まだ『あけおめメール』でも来るのか？ まあ誰も俺の住所なんて知らないしな」

誰か一人くらい年賀状のやり取りしておくべきだぞ、と親のような気持ちで彼の動きを目で追っているといきなり青ざめたのだった。

「え……完全に忘れてた！ ユキちよつと出かけるわ俺！」
いきなりどうしたのか、正月ボケでなにか予定をすっぱかしたのは明確なようにだけ尋ねてみると

「来週の授業初めにレポートの提出あるの忘れてた！ 神社の写真付きて書かなきゃいけないから今すぐ行って写真撮ってくる！ 一緒に行くか？」

「行く」

——そして武志の足元をついて歩いた。どこに向かっているのか尋ねると、まずは電車に乗ると言い出した。ネコが乗ってもいいものか再度尋ねると、インターネットでそんな写真を見たことがあるから大丈夫だと言う。その根拠は間違っているのではないかと三度尋ねると、ダメならその時考えようと言い出す始末。この行き当たりばったりさはどうにかならないものかと不満を覚える反面、初めての電車に少し心が高鳴っていた私だった。

そうして駅に着き、電車に乗った。切符を買う所でネコの切符は子供料金でいいのかと悩む天然さも見せたが、今は無事いい日差しの中揺られていく。

いていた。家の玄関に着くと俺は恐怖した。

「あ、武志やっとな帰ってきたのね、久しぶりね。身長は伸びた？」

「げっ、理沙姉ちゃん……」

この一見美人でフェロモン漂わせているのは俺の姉で次女である。ちなみに俺は末っ子長男姉四人ね。少しきつめな雰囲気のある外見以上に、中身は相当怖いお方である。姉四人からは散々いじめられたが、次女の理沙姉ちゃんは特に俺を可愛がっている反面いじめ方も昔から半端なかった。で今この歳になっても理沙姉ちゃんの顔を見ると少し萎縮してしまう。

「愛しの姉との久しぶりの再会で開口第一声が『げっ』ってなんなの？」

もうすぐ大学も卒業なのにまだ社会のマナーもわかってないの？」

「いやーサプライズで嬉しくてびっくりしちゃったー……というかほんと突然だね、連絡くれればよかったのに」

「電話してもあんたが帰省しないって言うから心配したお母さんの代わりに来たのよ。抜き打ちで来れば不細工な彼女でも見れるかと思っただのに、こんなとこで待たされるなんて」

危なかった。昔から理沙姉ちゃんに限らず姉ちゃん達はみんなそうだ。俺の彼女を見れば本人の前では言わないが、後々俺に「よくあんな不細工を連れて歩けるわね、私の弟があんな不細工の彼氏だなんて知られたくないわ」等々ひどい罵声を浴びせられる。もし今理沙姉ちゃんの企み通り女の子でも連れていたらなにも言わず写メを撮られて家族全員に散布されることだっただろう。そんなこともあって彼女はあんまり作らないんだけど。

「なにほっとした顔で突っ立ってるのよ、美人が寒空の下待ってたんだからまずは家に上げて暖をとらせるのが当たり前でしょ。早く鍵を開けなさい」

「あ、すいませんすぐに」

躡けられた犬のようにせっせと家に招き上げ暖房器具を利かしお茶を入れた。

「まずは今年一年の報告をしなさい」

「えっと報告と言われましても去年と相変わらずで、大学行ってたま

に公演したりだけなだけ……」

「ほう、それは去年の年末にも同じことを聞いたわね、去年は『来年こそ海外留学を決めて振り付け師の夢に一歩近づく！』とかなんとか大見得切ってたわね」

「はい、仰る通りでございますお姉さま」

「結局去年と同じじゃない。変な意地張ってないで、お母さんの紹介で留学行けるんだからそうしなさいよ」

「でもそれじゃ俺の実力じゃないよ。俺は自分の力でやってみたいんだって」

「大した実力もないくせに何を言ってるのあんたは。ちょっと天才だとかちやほやされたからって過信してたら痛い目見るよ」

自分にはなかなかの自信は確かに持っていたこともあってか言い返すことができなかった。俺の母さんはバレエの講師をしていて現役時代の伝手を頼れば海外留学もできるが、なんだか伝手が嫌だと感じて意地を張ってしまった。俺も確かだった。

「大学ももう卒業だっていうのに就職活動もしないで……本当にダンスで食べていくって言うなら早く留学するか劇団入るかなんか決めなさい。さてこの話は一旦こゝまでとして次の話ね、その黒いのなに？」

ユキが蛇に睨まれた蛙のように目を合わせてしまい動けなくなっていた。ダメだ目を合わしたら石になつてしまつて評判のメデューサの眼に捕まってしまった。

「二、ニャアー」

とても震えた声で精一杯の愛想を見せているのが可笑しくも思えたが、その気持ちにはよくわかるので助け舟を出すことにした。

「今月の頭に近くの公園で拾ったんだ。可愛いでしょ、名前はユキだよ。こいつはよく食うネコでねー蕎麦なんか大好物なんだよ、ほら」

「稼ぎもないのにネコなんか飼っちゃって。そんな余裕があるならもう仕送り止めていいって言っとくわよ」

「いやーお姉さまーそれはーちよつとー酷なんじゃないでしょうかー」

「まあいいわ、とにかく良くも悪くも変わりはないってことね、お母さんにもそう言っておくわ。時間があるなら年明けにでもいいから顔を

クリスマスが終わってあつという間に年越しムードの街中。しかしそんなことは武志には関係なく公演の練習に明け暮れていた。学校も休みに入ったことで朝から夕方までスタジオとやらに籠りっきりのようだ。そろそろ武志が帰ってくる頃か。

「ただいまー。あー疲れたー」

「おつかれさま。お腹空いた」

「お前は相変わらず人の顔見るなりそればっかだよな。もっと優しい声はないのかよ」

周りの友達の実家に帰ったり旅行などで年越しをするみたいだが、俺はいつもと変わらない生活を送っていた。というのも俺が一人暮らしをしてまで大学にきたのは家族との関係があまり上手く行っていなかったのもあり、半ば出て行ったような感じがあるからである。しかし話は戻るが日本という国は変わった国だとこのあたりでつくづく思わされる。ハロウィンが終わったと思えばクリスマス、クリスマスが終われば一気に年末ムードになる忙しい国だ、それなのにイースター祭はやらないしキリスト教徒が多く目立つ訳でもない。これだけ行事が好きなら猫祭りやトマト祭りとかもつと俺にも興味もてる祭りをやってもらいたい。そうすれば美結を誘い出すいい口実になったのに。いや年末のイベントってブータンの王制記念日くらいか。いやいや年末の○○納めとか言ってお飲んだくれるのも十分イベントのようなものか。なんてどうでもいいことをつらつらと考えるしかやることがない日である。

「武志、年越し蕎麦とお餅買いに行こうよ」

「何言ってるんだよ、まだ二十八日だって気が早い」

「お蕎麦食べてみたいんだなー」

「どんな贅沢なネコなんだよ」

「ねーお願い、今度言うこと聞からさー」

「ペットの口からそんな言葉聞くとはお兄さんなんだかショクッたぞ」

言われるがまま押し切られ半ば強引に連れ出された。なにも蕎麦をケチりたい訳ではないのだが、ここ最近お金がないのである。大学の奨学金や仲が悪いながらも家族なかなけなしの仕送りがあるものの贅沢な生活はできない。私的に使える前にも言ったように公演やレッスン教室などの臨時アルバイトでしか稼ぎがないので、俺の生活を見てわかる通り最近はその二つなのである。来月の公演のギャラが入れば自分へのご褒美に贅沢でもしよう。なにがいいかな、久しぶりに服を買ってみようかな。勘違いされやすいが俺だって服にくらい興味はある。しかし興味を持てる服というのが超高級ブランドばかりで、雑誌を見ても目を輝かせるばかりで到底手に入らないのである。しかしいくらなんでもそれではギャラが全額消えてしまうか。じゃあ旅行でも行こうかな。海外は無理だとして、国内で温泉旅行くらいなら大丈夫だろう。いやしかしユキを温泉に連れていく訳にもいかなければ置いていけもできないか。なんだかいっぱい使いたい道がないかと、ありもしないお金を使うことばかり考えていたらスーパーに辿り着いた。

「あのCMでやってた赤い蕎麦買ってきてね」

「おい、おねだりしといてパシリかよ」

「一緒に入ってもいいけど強烈なおばちゃん軍団に怒られるのは武志だよ？ これ兄ちゃん！ 食べ物置いてるとこにネコなんか連れてきたらあかんやろが！ 毛でもついたらもうたまらんで！ って」

「いやたしかにそうなんだけどさ……」

してやられた感じが否めなくて渋々と店内に入る。えつと赤い蕎麦ってどれのことだったかな。見たことも聞いたこともない名前のとてつもなく安いこの赤いパッケージの蕎麦か、日本に住んでいれば誰しもが知っているだろうと思われるがさっきのよりかは値段は張るこの赤い蕎麦かどちらだろう。そんなもの深く考える必要もなく素早く前者の赤い蕎麦を取って会計を済ました。

「赤いお蕎麦あった？」

「あつたよー、安かったからまとめ買いしちゃった」

「え、ほんと？ やったー！ 早く帰って食べよう！」

ユキの無邪気な顔を見てほんの少しの罪悪感に苛まれながら帰り道を歩

は颯爽と立ち去ったがここで想いを伝えてしまうのも良いのではないかと血迷ったのが功を奏したようだった。振り返ると彼女の姿はなく、追いかける形で家の方向に行つてみると窓辺のブロック塀の上で困り果てた姿が見えたので声をかけた。なんでも家に入れないと言うので少し図々しく美結の家に来ないかと誘つてみると良い返事がもらえたのでデートは思いがけず延長することになった。とここまでは良かったのだが、どうも私も美結の家に入れないのだ。私の考えがあまく、事を急いたあまりに美結がデートで遅くなることを忘れていたのだ。しかしユキさんはそんな愚かな私を責めることなく、お喋りでもしましように天使のような微笑みを見せてくれたのである。なんと素晴らしいネコなんだろうと思ひその言葉に甘えてのんびりとクリスマス空気に浸っている、美結が帰つてきてとても驚いた表情を見せたと思いきやなにか閃いた面持ちで私たちを家に入れてくれたのであった。

彼女と電話を切つてすぐ彼女の家へと向かった。家の近くに着きもう一度連絡すると迎えに来てくれた。今日の彼女はいつもよりオシヤレをしていて、さっきまでデートしていたのが見てとれた。そのオシヤレが俺の為ならもつと可愛く見えていたのにと落胆する反面、家の上がるという予想外過ぎる急接近にまたしても小さな緊張感もあった。少し待つてと言われ玄関の外で待っている、彼女の慌ただしい足音が聞こえてきて、可愛らしく思えた。そしてお待ちと手招きされお邪魔しますと上がらせてもらった。そこにはイケメンのクウちゃんと思慣れたユキが居て密かにユキにウインクをするとユキも密かにウインクで返してきた。ネコつてウインクできるんだと驚きながらも、美結に勧められるがまま可愛らしいテーブルに座り少し部屋を見渡した。とても綺麗にされた部屋でさっきまでどこを片付けていたのか不思議に思っていると、ティーバックの紅茶を出されたので冷え切った体に有難く頂いた。

「今日はデートだったの？」

「うん、さっきまでそうだったんだけど体調悪いから帰ってきたんだ」

「え、ごめんね体調悪い時にお邪魔しちゃって。すぐ帰るわ」

「ううん、そんなに悪くないから大丈夫だよ、ゆっくりしてって」

彼女はとても優しい笑顔で自分の分の紅茶を持ちながら俺の目の前に腰掛けた。いつの間にか後ろ髪を束ねていわゆるポニーテールになっていて、その真っ白なタートルネックのニットとは最高の相性で絵になっていた。

「武志はデートじゃなかったの？」

「友達に無理やり誘われて合コン行つてただけで、つまらないから先に帰ってきた」

「なにそれー、ひどい男だね」

「だって本当の事だもん。あ、髪染めたんだ」

「あ、気づいてくれた？ ほんのちよつとだけ茶色入れてみたんだ。

みんな全然気づいてくれないのによくわかったね」

彼女との他愛のないやりとりはとても楽しい時間で、さっきの合コンにいた女とは何が違うのか不思議で仕方なかった。そうしてお互いに愚痴を言い合っているとすっかり深夜になってしまった。

「もうこんな時間だったね、そろそろ帰るよ。ユキのことありがとう」
「ううん大丈夫だよ、いつでも遊びにきて。なんなら泊まっててもいいけど？」

「泊まるような距離じゃないよ。それに用意もなんもないしまた今度ね」

少し冗談を交えながらも一度お礼を言つて家を後にした。帰り道の途中で彼女からラインが来て少しステップしながら家路に着いた。

「ユキー ナイスー」

「なんだ、もう自分でも認めてるんじゃない」

「んーそうだな、好きだな」

ネコに恋愛相談の相手になつてもらおうという頼りない男の恋がはじまったのかもしれない。

乗っている。そうして駅に着くと尚都と愉快な仲間たちがお出迎えしている。

「えっと、男が尚都と大学で話したことはあるけどあまり知らない奴か、んで女がまったく知らん三人。三対三ってことね」

どんな面子か確認してどう過ごすかを簡単に考える。言われるがまま彼らに連れられウィンドウショッピングやら食べ歩きやらを強いられる。なんで六人も集めてこんなことをするのやら。と、文句は心の内に秘めておいて表向きは笑顔で愛想良くしておくど女の子がこっそり奢ってくれるので有難かった、さつきまでは。見覚えのある女の子の後ろ姿が見えた。その隣には見覚えのない男の横顔があった。俺はそれが美結だどこかでわかつてはいたがその事実を突きつけられたくはなくて、知らぬフリをした。心ここにあらずのままですっかり夜になり、大したことない居酒屋で合コンの本番がはじまる。他愛のない話が永遠と続き、ひどく不味いお酒が永遠と目の前に出され嫌気が差す。ネコのようにすり寄ってくる女からはお酒の不味さを助長させる香水の臭いがしてくる。途中、トイレのフリをして帰ろうとしたが流石に尚都に悪いと思いついながら引き返した。ここまでつまらなく思うのも街で彼女を見かけてからだ。ここまで思ってしまうのはユキが言う通りに恋なのかもしれない。だからどうしようもない。今日は考えるのはやめて不味い酒と女で我慢しようと思う。

——「今日は楽しかったです。付き合っていただけでありがとうございます」

彼はそう言って例の通り家の近くまで送ってくれた。不思議と彼の堅苦しさにも慣れてきた日だったが、いつかは彼の気持ちに返事をしなくてはならないのかと考えると少し気が重くなる。さて歩き疲れたのでさつきと寝ようと思ったのだがまだ武志が帰っていないようだ。これはしくじった、出る時に一緒に玄関から出たものだからいつもの窓の鍵が開いていない。どうしようか……

——「ごめんね、また連絡するね」

「絶対だよー待ってるからね、じゃあね武志くん」

という訳でやはり気分が乗らないので帰ることにした。というか気分は最初から乗っていないのだが、家の窓が開いてないからユキが入れないことに気づいて居ても立ってもいられなくなった。別れをさつきと告げてすぐさま電車のダイヤを確認し、駅まで急いで走った。家に着いたのは十二時前だったか、ユキの姿は近くに見当たらなかった。

「なんだ帰ってないのか？ それとも入れないからどっか行ったのか？」

少し心配になって近くをうろろしていると携帯が鳴ったが、どうせさつきの女だろうと思いつくには確認しなかった。飲んだこともあつて体が重かったので自販機で水を買って一旦帰ろうと思いつく何気なく携帯を見ると見慣れない美結さんからの連絡だった。小さな緊張感を持ちながら内容を確認すると驚いたことにユキが彼女の家にいるという連絡だった。急いで彼女に電話して確認すると彼女の飼いの猫のクウちゃんと一緒に家の近くにいたので家に上げたい。どうしたものかと思つたが迎えに行く他はないので詳しい家の場所を聞いていくことにした。

「ユキ……ナイス」

彼氏との退屈なデートに飽き飽きした私はとても体調が悪くなったので、彼氏のデートプランに反して解散することにした。彼氏はとても心配してくれたが、私を気遣うなら早く帰らしてくれと言わんばかりにタクシード帰った。家に着いたら化粧を落として武志くんへ連絡してみようかとシミュレーションを重ねていると彼の飼いの猫がクウちゃんと私の家の玄関の前で香箱を作っていた。驚きを隠せずとりあえず玄関を開け招待する動きを見せると二匹は上り込んできた。しかしこれはいい口実だと思いつ、シミュレーションは変更して化粧を落とさずに彼に連絡をした。

「クウちゃん……やるじゃん」

ユキさんとの初デートはそこその出来だったが反省点も多いなと考えるながら彼女を家の近くまで無事送り届けた。口惜しく別れを告げ一度

「まだ家にいるのかなー、なんだか帰りたくなってきました。さつきまで武志くんと会ってたんだ、溜まってたこと話せてスッキリした」

「ニヤアーン」

私の言葉がわかつているのかクウちゃんもにこやかな返事をくれた。

「武志くんもダンスの公演のことで悩んでたんだって、なんかわかんないけど解決したとかでその公演に招待されちゃった。そうだ、クウちゃんも連れてきていいよってさ。なんでもアイスショーの時ユキちゃん連れて来てたんだって、おもしろいよね。連絡先も交換したし連絡してみようかなー」

「ニヤンー」

「あ、ダメだよ。これじゃ浮気みたいだよ、やめとこ」

なんだかクウちゃんはがっかりした雰囲気だった、いつまでも外でネコに話しているのも恥ずかしくなって一息ついて家に帰ることにした。すると玄関の扉には鍵がかかっており、中は真っ暗だった。彼氏がいないことに安心感を覚えてしまつて自己嫌悪に少し陥りそうだったが、思いとは裏腹にお腹の虫が鳴りクウちゃんにご飯にすることにした。

「とりあえずご飯食べよっか、でさ聞いてよ武志くんつたらいきなり私のこと持ち上げるんだ。びっくりしたけどやっぱりダンス上手かったんだよ——」

クウちゃんはいつも通りだんまりだけど、ちゃんと私の話を聞いてくれるようにですつかり色々話してしまつた。来月の公演楽しみだな。

—— みんなのクリスマス ——

もうすつかり年末で街はいつもより寒さを増しているがいつもより人の多さも増している。なんでも今日はクリスマスで街中は幻想的に着飾っている。人間のイベント事などあまり興味がない。かく言う私はクウさんとデート中だ。しかし彼とそういう仲という訳ではなく、武志がクリスマス合コンとやらに誘われたとかで出かけるから暇をすいていつも

通り散歩していたら、クウさんが家の近くにいたのだ。なんでも私に会えないかと思ひ散歩していたのだから。そうして私は彼にリードされるがまま煌びやかな街並みを歩いている。時刻は夕方の五時を過ぎたあたり、少し歩いてイルミネーションが有名な通りへと向かっていた。

「武志さんはお出かけですか？」

「はい、なんでも合コンらしくて乗り気じゃないながらも明るいうちに出ていきました」

「遊び盛りの歳ですもんね、美結も彼氏とデートと行って出ていきました。でも美結はこの間の喧嘩のことを引きずっているようで私には乗り気ではないように話していました」

「美結さんとは喋らないんですか？」

「やはり驚いてしまつてしまうでしょうから。それに喋らなくても意思の疎通は出来ていますよ」

「そうですか。彼氏さんの愚痴はよく聞かれるんですか？」

「そうですね、ここ最近多くなってきましたね。それと同時に武志さんのお話もよく聞くようになりましたよ。なんでも先日私たちが会つた日も、同じ時間に武志さんとお会いしてたとかで。恋人として付き合つてはどうかと私は思いますね」

「私も武志から聞きました。武志も最近笑顔で話すことと言えば美結さんのことばかりで。それでも好きじゃない、分かり合える友達だ。とか言うんですよ、人間って鈍感なんですな」

「ネコなら自分の気持ちに素直ですからね、私みたいにデートしたくなつたらこうして誘いますし」

なんとも返事し辛いことを言われて私は言葉に詰まる。前から薄々はクウさんの気持ちに気づいていたが、可もなく不可もないので返事のしようがない。するとさすが紳士は察したのか優しく流してくれた。

「イルミネーションに近づいてきたようですね、道行くカップルも増えてきましたね」

というところで尚都の強引な誘いでクリスマス合コンに来た。合コンと言つて暗くなる前から呼び出されて相当面倒くさい顔をしながら電車に

すが、どに行つたのやら……」

ほう、これは武志に教えてやる。武志はなんだかんだ言いながら美結さんのことが気になつてゐるはずだ。

「それで見つからず散歩ですか？」

「ええそうですね、家に帰つても美結の恋人が居座つてますからね。まったくあの男は気に入れません」

「クウさんがそんな風に言うなんて、よっぽどですね」

「よかつたらご一緒に散歩させてもらつてもよろしいですか？」

正直に今は一人、いや一匹か、夜風に吹かれてふらふらと歩きたい気分だけど、快諾する理由もなければ断る理由もないので愛想よく返事をし、少し一緒に散歩することになった。

「ユキさんは普段はどの辺りで遊んでらっしゃいますか？　あまりこの辺りでは見かけませんよね」

「普段はあまり外に出ないですね、武志が帰ってくるまでずっと家で過ごしてます」

「それでお会いすることがなかつたんですね、なら今日は偶然ですね良かったです」

「そうですね、美結さんのことは気にならないんですか？」

「少し心配ですね、でも彼女も子供じゃないので気が済めば帰ってきますよ。またどこかで武志さんとばつたり会つたりしてるかもしれないですね」

「たしかによくばつたり会つてますもんね、武志と美結さん。でも喧嘩するほど仲が良いって言うじゃないですか、すぐ仲直りするでしょ」

「たしかに仲は良いのですが、それも美結が彼との関係を上手くしているからですよ」

詳しいことを聞くほど興味はないが、どうもこの口ぶりからして彼氏の方に問題があるみたいだ。しかしそれ以上はどうでもいいことだ。それにクウさんは悪いネコではないが、言葉使いなど多少堅いので少し疲れてくる。そんな風に考えたのが見抜かれたのか

「ユキさん、退屈ですか？」

「いえそんなことないですよ、退屈そうに見えちゃいました？」

「なんだか心ここにあらずつて感じで少し気になりました。私の考えすぎでしたね」

なんとも気回りがよく本当に紳士なネコである。モテるんだろうな私以外のネコからは。そうして彼と小一時間ほど散歩したところで気持ちも満足したので帰ることにした。彼は帰る方向が同じだから途中まで送ると言ってくれたが、私は美結の家がどこなのか前の会話で聞いているので知らないフリをしておいた。

「ユキさん、私普段は向こうの駅の近くにある小さなお寺でよく暇をしています。また気が向いたら遊びに来てください」

ということと紳士とはお別れをした。さて武志が出てから時間も経つたので彼も帰ってくる頃だろう。どうせご飯買ってくるの忘れてるんだろうな。そう考えながら家近くの公園に着き、ブロック塀を目にしたあたりでビニール袋を持った武志が現れた。

「おーユキ、ただいま。ユキもいま帰り？」

「うん、ちょうど私も帰り。ご飯買ってくるの忘れてなかつたんだ」

彼はさっきまでの差し迫つた顔は忘れた様子で、その表情は晴れていた。なにか良いことでもあったのかと聞くと、またその口からは美結さんの名前が出てくる。ここ最近何かある度に美結さん美結さんのように少し嫉妬すら覚えてしまふそうだ。

「なにむすつとしてんだよ、玄関から一緒に帰ろ」

そう言いながら彼の持つビニール袋から漂ういい匂いに釣られて彼の足を追いかけていった。

家を飛び出してからあつという間に時間が過ぎてしまった。彼といると嫌なことを全部忘れさせてもらえるような気分を感じて、すこしにやけていると

「ニヤー」

「あれ、クウちゃんもお出かけしてたの？　それとも私のこと心配してくれてたの？」

可愛い飼猫が心配した面持ちですり寄ってきた。そして現実に引き戻された気がして、彼氏のことを思い出した。

—— ペットの恋愛事情 ——

「ちょっと走ってくるわ」

「はい行つてらっしゃい、頑張つてね」

そう言つて飼い主はまた出かけてしまった。なんでも来月に控えた公演で大役を任されたようで、この間のコンクール以上に張り切っているようだ。さて私はどうしようか、相手もいなくて暇だな。いつもより暇を持って余した私は部屋の中を走り回つたり、どきどきしながら武志に怒られそうな場所で爪とぎをしたりした末に外出することにした。手慣れた動きで本棚に飛び乗り、ネコが一匹寝ころべるほどのある窓枠へと伝う。窓の鍵を器用に下へと開け、爪でカリカリと開ける。窓を開けると足元にはブロック塀があるのでそこに足をつけ、しっかりと窓は締めしておく。残念ながら鍵はかけられないので、泥棒さんがそのことに気づかないように祈りながら尻尾を立ててブロック塀を闊歩していった。

「寒いけど、冬の空気が澄んで好きだ、気持ちがいい」

黒猫が一匹つぶやきながら闊歩していると、マフラーに鼻をうずめた青年がこちらへと歩いてくるのが見えた。もちろん人間なんて見慣れたものなので気にせず歩き続けるが、どうやら私に興味を示しているみたいだ。

「にゃー」

下手な鳴きまねで呼び止められ、少し警戒した態勢で振り返る。青年は近づき過ぎず一定の距離を保つたままそこにいる。しかし私と目を合わせようとせず、私が余所を向いた隙に見つめていたようだ。思わず私と目が合うと目をきゅっと締め、好意的な合図を送ってくる。この青年がネコを好きなのは一目瞭然だけれど、それに加えてネコに詳しいようだ。まずネコは警戒心が強いので一定の距離を近づくと逃げてしまうのが基本だ。さらに目を合わせてから目を締める仕草は、ネコの間で好意的に思っているという仕草である。しかし見も知らぬ人間にそんな合図を送られても寒気がするだけなので、私は興味がない背中で歩き出した。さようなら好青年さん。

さて青年の視線を背中に感じながらブロック塀を降りて公園へと出た私は、他のネコがいないか五感を研ぎ澄ませてみるが、どうやら気配は感じられない。どこかで寒さを凌いでいるのだろうかと思いつく場所を考えてみたが、武志に飼われるようになってから外に出なくなつたので最近の流行りの場所がわからない。そこで昔からネコたちが多く住みつく近くの神社に向かうことにした。また歩き出して五分、神社に辿り着くと相変わらず大小様々なネコたちがたむろしていた。顔馴染みも多く久しぶりに話しかけようかなと思つたら皆が何かの気配に気づき一斉に同じ方向へ走り出した。そのネコの大行進の先には、年輩いた男が自転車のかごに大きなビニール袋を入れて歩いてきた。あの老人はこの辺りでは有名なネコの調教師のような人間である。定年で老後を持って余したのか、何年か前からこの神社で日が暮れると大勢のネコたちに食べ物を配るのが日課のようである。古く小さいながらも立派な能舞台でくつろぎながら大食堂の様子を見て過ごしていた。するとそこに意外な顔が通りがかつたのに驚いていると、向こうもこちらに気づいた様子だった。

「これはユキさんじゃありませんか。お久しぶりです」

彼はクウといつて、私の飼い主の友達の飼い猫である。十日ぶりに会つたのだろうか、やはりイケメンである。

「お久しぶりですクウさん」

「しばらくですね、ユキさんもご飯ですか？」

「いえ、少し暇つぶしに散歩です。でも意外ですクウさんが外でご飯つて、勝手なイメージですけど」

少し失礼なことを言つてしまったかと顔色を窺うと、紳士はにこりと笑い否定した。

「いやいや私も散歩みたいなものですよ、たしかにあそこに混じつて食べたいほどにお腹は空いてますが、いつも家で食べないと美結に怒られるので」

「あの可愛い飼い主さんですか？ あの可愛い顔で怒るんですね、想像できません」

「怒る時はとてもはつきりと怒りますよ。さつきも恋人と喧嘩して家を飛び出してしまったんですよ。それで少し探しに追いかけてみたので

そうなんだ、我慢しすぎるのも良くないよ。と俺は優しく声をかけるが、そう言いながらすぐ仲直りするのはお決まりだと考えていた。それに彼女が飛び出したらまずは追いかけるのが彼女の役目だろ、なにやっつんだよと見も知らぬ彼氏に説教もしていた。

しかしそれからしばらく会ったには長いこと彼女の話を聞いていたが、どうやら本格的に別れが近いような話だった。どうも聞いていると彼氏がダメ彼氏のような話だ。美結側の話しか聞いていないが、どうやら女の気持ちに気づけない典型的な鈍感男みたいだ。それならまだしも、鈍感に加え自己中心的な思考行動ときた。そんなに愚痴るなら早く別れなよ、と言う機会を探していた。しかしここで良い流れで話していた彼女から不意打ちがきた。

「武志も公演で悩んでるってさっき言ってたけど、どうしたの？」

「いや大したことじゃないよ。それに俺けっこう天才だから大丈夫」

「ふーん、私にはいい話させといて武志は教えてくれないんだ。悲しいなー」

「ううっ、来月の公演でソロの演目任されて悩んでただけです……」

「そうなんだ！ すごくいねソロって、それだけ上手ってことだよね」

「ソロやらしてもらえないのは嬉しいけど、尺も長くなって不安しかないんだ。美結はフィギュアでそういうのなの？」

彼女に上手く乗せられて今度は俺の悩み相談になってしまった。しかしあの広い氷の上を一人で滑っている彼女の意見を聞いてはみたい。

「そっだねーまず私はシングルで滑ってるから、いつでもソロなんだよね。不安もいっぱいあるけどその方が楽しくない？」

彼女はテレビの中の美少女戦士に目を輝かす少女のようにそう俺に力強く問いかけてくる。

「うーん、確かにソロをやるのは楽しみなんだけど、不安つてのが振り付けを決められなくてさ」

「どんな曲使うの？」

彼女がそう言うので手持ちの音楽プレイヤーとイヤホンで彼女に聞かせることにした。彼女はなにも言わずお互い耳にイヤホンをつけた。自然と彼女との距離が近づく。距離感気恥ずかしさを覚えてしまった俺とは

対照に彼女はきれいな目を一文字にしてイヤホンに集中している。彼女の手先が静かに舞い、暗がりには舞うきれいな手先にまた見惚れてしまう。「私だったらここでスピンを入らせてから助走を短くしたいからステップを工夫するかな。どうかな？ って言ってもフィギュアとはまた違うか」

「いや、わかる。すごくわかる！」

彼女の口からそのイメージを聞いた時、俺は今まで味わったことない感覚に陥った。俺が今まで頭の中で描き続けていた設計図と、今さっき彼女の口から口から語られたものがぴったりと一致した気がした。頭の中が一つになった気がした。

「わたしも次の試合でこの曲使ってみよう」

そう言うのと彼女がぱつと軽やかに立ち上がり踊りだした。それは突然で、さっきまでとは打って変わってすっかりいつもの美結だった。いつの間にか疲労を忘れた俺は釣られて踊りだす。彼女がアティチュードのポーズをとるから俺はフェッテを回ってみせる、彼女は見様見真似で回る。即席でやっているのに上手なことに驚いた俺は、リフトで彼女を高く高く上げてみた。

「武志が踊ってるのとこやっと思えた！ コンクールの時もこの人どんな踊りするんだらうって気になってたんだ。でも気づいたらいなかったんだから」

「どう、けっこう上手いでしょ。美結さんもセンスあるよ、流石だね」

「でもコンクールではやっぱりダメで、フィギュアとは世界が違うって感じだった。そっか、良かったら教えてよ」

「いいよ、じゃあまずは……」

そうして臨時レッスンが始まった。あの時は臨時講師だった彼女が今度は生徒になるという不思議なことだった。寒さと時間を忘れてずっと教えていた。人に教えることが好きで歳をとったらレッスン教室でもしたいと思っていた俺はとても楽しかった。それ以上に彼女といえるのはとても心地良い。恋をしていまいそうなほどに。

口だ。かなりへばって来た。少しペースを落としてイヤホンでソロのテーマ曲を聴き頭の中でイメージを湧かせようと頭も体も酷使していた。どの場面でもどんな技をすればいいかはわかった気がした。しかしそこまでどうやってそこに繋げるのが最善なのかはわからない。体だけではなく頭も疲れていると、人とすれ違い肩が擦れる程度に当たった。走るのを止めず咄嗟に「すいません」と言う。しかし肩を掴まれ体を止められた、それと同時に頭の中も止まった。イヤホンをつけながら謝ったのが気に食わなかったのか？ というか当たってもいないくらいだぞ、ガラの悪い人なんだろうな！怖いなー。と一瞬で考えて心して振り返ると……

「あ、よかった武志さんだ、暗くて見えなかったけどもしかしてって思った」

「あ、美結か。ヤンキーかと思つてビビったあ。暗くてわからなかったのによく肩掴んで止めたね、笑っちゃうよそれ」

「見えなかったけど直感でわかりました。すごい汗かいてるじゃないですか」

「ちよつと公演のことで悩んで、トレーニングついでにスッキリしようかと思つて」

「それはお邪魔しちゃいましたね、止めてごめんなさい」

「大丈夫だよ、もうバテバテで休憩しようと思つてたんだ」

もちろん本当はそんなつもりないけど、この前のお礼も言えてなかったことだし。そう考えて近くの自販機で彼女の分のジュースも買って、ベンチに腰掛ける。少し汗臭さを気にして彼女との距離を空け、タオルで顔を拭いているが一向に彼女から話す気配がしない。

「そのジュース嫌いだった？」

「あ、好きですよ、ありがとうございます」

そしてまた夜風だけが聴こえる。その表情は至って普通で、ただ話す気分じゃないだけなのか少し緊張でもしているのか、どっちとも捉えられないものだった。しかしいつもは前向きな瞳がなんだか石畳の地面ばかりを見つめていた。

「というか美結はなにしてたの、カバンも持ってないってことは散歩？」

「はい、そんな感じですよ。ちよつと夜風にあたらうかなって」

この言葉からしてもやはり彼女が悩んでいるか落ち込んでいることが感じとれた。

「敬語、お互いいらないうって言ったのに。それにさつき武志さんって言つてたし」

「あ、ごめん、なさい。なんだかやつぱり慣れなくて」

彼女は二ミリだけ口角を上げてそう言う。

「他人行儀みたいで嫌だな、もしかして俺のこと苦手？」

「そんなことないよつ、好きだよ……です」

彼女は言葉で間違えたことで口を強く締めて頬を赤らめた。やつと表情が変わつて少し俺は安心する。

「いきなり告白なんて恥ずかしいよ」

「違うよ、間違えただけに決まつてるじゃん、からかわないですよ」

「やつと笑つた。よかつた」

そう言うのと案の定彼女は目を伏せ気味にごめんと言う。少しめんどくさい気もするけどここまで来たらその胸中を聞いてみようかと思う。

「なんかあつたの？ 落ち込んでいるように見えるんだけど」

「そんな暗い顔してた？ うんちよつと喧嘩しちゃつて」

最初は彼女も俺と同じようにフィギュアスケートのことで悩んでいるか、進路のことで悩んでいるのかと勝手に山を張っていたが、喧嘩という言葉を聞いてユキが見たと云つた彼女の事を思い出した。

「喧嘩つて友達と？ それか彼氏？」

「彼女の方……私の家に来てただ喧嘩して飛び出して来ちゃつた。おつかしいよね、私の家なのに出て行って言えなくて私が飛び出すなんて」

「おかしいね、美結は優しいんだね」

彼女が少し無理をしてはにかむから俺も合わせてそんな表情をとるようになった。

「すぐ仲直りできない雰囲気なの？ できるなら早くした方がいいよ」

「大した喧嘩じゃないんだけど、普段から小さい不満とか溜まつてて爆発しそうだから会いたくないんだ」

「おかえり、寒いのに遅かったね」

そうユキに言われてふと時計を見ると、さつき見た時間から二時間も経っていた。携帯もなにも持たず出たものだから気づかなかった。

「二時間も考えてなんにもできなかつたのか……これは追い込まれるだろうな」

「珍しく悩んでるみたいだね、武志らしくない」

「俺だって悩む時くらいあるって、授業のレポートとかでもいつも悩むし」

「それはただバカっただけでしょ」ほんといつはネコらしくないことばかり言ってくる、

「なんとかなるでしょそのソロとかいうやつ、それが武志らしさだっ
て」

こうやってさりげなく褒めて応援してくれるから。

「ユキってモテるんだろうな」
「なにをいまさら」

そして二日後、明日は祝日だから何して過ごそうかユキ連れて電車でも乗って気まま旅でもしてみようか、久しぶりに誰か誘ってボウリングでも行こうかな。素敵な休日を考えていた夜、まったく素敵じゃない着信がきた。

「もしもし武志、素敵なお知らせだ」

「こんばんはっす朝田さん」

素敵じゃない着信はヘルプ先の劇団を仕切っている団長の朝田さんである。けっこう慣れ慣れしい話し方しているが、モダンの世界ではかなり有名で海外にも少なからずファンを持つ人である。

「どうしたんですか、ヘルプ公演の追加ですか？」

「追加っちゃー追加なんだけども、あのー武志が先月フった女の団員いたろ？」

「え、誰でしたっけ」

「吉井華ちゃんだよ、あの小っちゃくて可愛らしい子」

確かしつこく誘われたから一回デートしたらその場で告白してきた勇氣

ありすぎる子だ。

「あの子がさ、今月いっぱいうちの劇団やめることになったんだわ。それでさ来月の武志のソロがある公演のプログラム変えなきゃなんないの」

これまた急な話だな。今月いっぱいと言っても、もう十二月下旬だっというのに。もしかしてソロなくなるとかな？

「まあ色々構成考えただけど、どうしても武志のソロんとこを伸ばして欲しいんだよね、尺を」

「え、ちよつといきなり過ぎませんか。待つてくださーいよ」

「あー大丈夫だから心配すんな、曲はこっちで編集し直しとくから。詳しい話はスタジオ来た時でいいから。じゃあそういうことで」プー
プー

……相変わらずなんて勝手な人なんだ。リーダーシップがあつて頼れる反面、マイペースすぎる時がある。曲の編集の前に振り付けだよ。なんも思いついてないのにまだソロ長くなるってどうしたらいいんだ。それに元から長めのソロなのに、これ以上長くなったらスタミナの面も厳しい。もう山添さんをお願いして全部考えてもらうか？ なんか負けた気がするけれど。

「どうしたの武志、電話握つたまま頭抱えて。フラれたの？」

「勝利の女神にフラれた」

「じゃあ自力で勝つしかないね、他力本願なんかやめなよ」

「ネコのくせに難しい言葉使うな」

しかしユキの言う通りだな、できるとこまでは自力でやるしかない。本番まであと一ヶ月と少し。二週間前までに完成できなかったら山添さんに頭下げよう。あの人なら二週間あれば作れるだろう。

「ちよつと走ってくるわ」

「はい行つてらっしゃい、頑張つてね」

まずは基礎体力を鍛えよう、走りながら振り付けも考えよう。

俺は今、運動公園のまばらな街頭の中走っている。走り込むときはいつもこの敷地内を大きく周回する。一周が約一キロで、もうすぐ三キ

「いや絶対に美結だって、たしかにその人もかっこよかったし上手かったよ。でも美結の方が可愛い」

「なんでかっこいいと可愛いを比べてんのよ」

「正直な所、フィギュアスケートってバレエの目線で見るとけっこうひどいんだよね、膝とか曲がってるし。でも美結は違った、芸術的な美しさも感じられたよ」

「いきなり真剣な話しないでよ、言い返せない」

「ん！ なんか練習したくなってきた！」

突拍子もないセリフを言って武志は立ち上がった。そしてご飯をほったらかしてクローゼットへと向かった。ん、クローゼット？ あ、気になっ

てて忘れてたな。

「武志どうしたの？ ご飯まだだよ」

とか白々しく言いつつクローゼットの中を見ようと武志にすり寄る。「実は来月にね、よくヘルプに呼ばれる劇団の公演でソロを任されたんだ。その振り付けのアイディアを修正しようと思いついた」

ふーん、っと聞き流してクローゼットの中を覗くと中には、服と靴がいくつもあった。あと宝箱とか書かれた段ボール箱。

「これなに？ 武志がちゃんとハンガーにかけてるじゃん」

「ダンスの衣装と練習用の服とか靴とか」

そこからはいつもの洗剤の、少し革の、そして汗の匂い香りが漂っていた。とてもきれいに使い込まれ、様々な経験を武志とともに乗り越えてきた雰囲気があった。そんな大事な衣装が置いてあるからこそ、武志は私

がクローゼットの中に入るのをあんなに嫌がったのが匂い香りで理解できた気がした。

「ちげーよ、毛がついたり粗相されたら嫌だったんだよ」

「勝手に心を読むな」

ちよっと変わったやりとりをしながら彼はてきぱきと着替えた。

「それじゃ、ちよっと留守番よろしく」 バタンッ

まるで置手紙のように彼はそう言って冷たい風の中走っていった。ていうか着ていった服、長袖一枚だったけど。

——レモネードでも作りなさい——

思いつきで飛び出したものの、寒い。十二月の下旬になろうかという日にかんりの薄着で出てきてしまった。

「まあでも動けば温かくなるでしょ」

そう思っただけでウォーミングアップを兼ねて公園まで走りながら体をほくす。温まった体を冷やさないようにまずは軽く踊る。フェット、ピルエット軽く回ってジャンプ。リフトも練習したいんだけど相手がいないからイメージで。そうしながら気ままに体を動かしていたら、そこそこ汗ばんできた。さてここからが本題、ソロの振り付けを考えなくては。テーマは、人の寂しさ。劇団の美人振付師の山添やまぞえさんが大まかな部分は考えてくれたけど、

「あなたのソロなんだから盛り上がりの所は自分で振り付け考えてみて、好きなように踊ればいいから」

とかなんとかいきなりの無茶ぶりだった。たしかに劇団員のようなペー

スでヘルプには呼ばれているが、正式な団員ではなく只の天才学生アルバイトダンサーの俺にいきなりソロ任せて振り付け考えてこいなんて。

なにより、人の寂しさ。なんて俺には心から共感することが少ないから頭を抱える点である。

「んー哀愁を漂わせればいいってもんでもないしなー。寂しさを行動

の源とする人間の価値とか難しいこと言ってたよな……なんだそれわかん

らんわ」

頭の中をいっぱいにしながらひたすら踊ってみるがどれもしっくりこない。本番まであと一ヶ月ちよっと、学校の課題のことも考えるとあまり余裕があるとは言えない。今日のアイスショーで色んな刺激があつて良いイメージが浮かんで来たが、それを丁度良く表現できる振り付けが思いつかない。ひたすら悩んだところでお腹のアラームが鳴る。

「動いたらお腹空いたー、つてかそういえばご飯途中だった。行儀悪いし寒いし帰るか」

——「ただいまー、うう寒かった。ご飯もっかい温めよっ」

髪を揺らしながら、会場の方向へと消えていった。そしてふと武志がスマートフォンで時間を確認するとまだ十一時だった。

「開演まであと二時間もあるのか、あそこ芝生で昼寝でもするか」
そう言って芝生へと行き寝ころぶ。武志はまるで着信中の携帯のように体を小刻みに震わしながら寒いと連呼する。十二月の芝生で寝ころぶなんてそれは当たり前だろうと思うが、彼の服の中にいる私は心地よかった。暖かく彼の呼吸で上下するお腹が良く私の眠気を誘った。

——すると次の瞬間、彼ががはつと起き上って、まるでコインランドリーに放り込まれた洗濯物のように回されて私は起きた。

「なんだよーゆっくり起きろよ天バ」

「いつの間にか普通に寝てた！ いま何時!？」

いつの間にか二人ともぐっすり寝入ってしまったようだ。私はともかく、武志はよくこんな寒い中で熟睡できたなと思う。そして近くの時計台に目をやると、大きな時計の針は少し開いた「く」の字になっていた。

「もう一時二十分じゃん！ 寝過ぎした!」

慌てた武志は私を担いで猛ダッシュで走った。会場に入る時には子供がおもちゃを隠すみたいに、ちゃんと私を懐に抱えてこそこそしていた。そして観客がショーに夢中な中、静かに急ぎ足で水のすぐ目の前の席に腰掛けた。受付でもらったプログラム表を見てまだ二番目だと知ると私も武志も胸を撫で下した。私が服の中で無理やり伸びをしてもぞもぞと胸元から顔を出したところで、黒いさらさらの衣装を身にまとった男が水の上でちょうど決めポーズをして少し大きな拍手が鳴った。

「それでは続きますして、二十二歳 現役大学生ながら注目を集める日吉美結さんです」

すると男女問わず大きな歓声に迎えられて彼女が颯爽と氷上に姿を現す。その振る舞いには貫禄があり、白一色の清楚な衣装は彼女にとてもよく似合っていた。何度も観客に向けて手を振りながら、リンクの真ん中へと向かい辿り着くと私たちに小さく手を振った。

観客は、彼女の演技を知ってかその容姿からか分からないが、まだまだ歓声と拍手が鳴り止まない。しかし彼女が凜とした顔を見せると会場が静まりかえった。そして素敵に破顔すると懐かしく古い曲が流れはじ

めた。

「いいね、ローマの休日だ。俺あの映画大好き」

彼女はとても楽しそうに氷の中で舞っている。ジャンプではもちろん、ステップなどで時折飛び散る氷が彼女を包みこむように見え幻想的である。たしかに、夢みたいに素敵な休日を私たちは過ごすことができた——

彼女の演技は大いに観客を沸かせ、スタンディングオベーションを送る人も少なくなかった。その後の選手たちもコメディ感のある人や小森選手などで、アイスショー自体も大盛況の雰囲気だった。

「来れてよかったな、美結にお礼言わなくっちゃ」

たしかに、受付を通る時にチケット販売の声がちらつと聞こえたけれど、少し高い値段だったようだ。武志が美結さんを探してうろろうとしてみると、大きな人だかりに遭遇した。熱狂的なファンたちが小森選手でも取り囲んでるのかと思つて私も武志も気にしていなかったが、もつと聞き覚えのある名前が人だかりに呼ばれていた。

「あれ美結じゃん。すっげーサインやら写真やらで囲まれてるよ」

私も気になって武志の肩によじ登つて見てみると、美結さんがまるで、記者たちに誠意を込めて握手していくアン王女のように笑顔でファンたちに応えていた。

「うわーお礼言いたかったけどこれじゃ顔見るのすら大変だな……また今度にするか」

そうだね、またどこかではったり会えるだろう。時計の針が九十度へなるうとする少し手前、私たちは太陽の温かさを背中に感じながら帰路に着いていた。家に着くまでずっとアイスショーの感想を言い合っていた。ご飯を買うためにスーパーに入る時も、パーカーに包まれながら武志の首元で喋りあっていた。もちろん他人に聞かれないように小声でだけけど、ネコつてこんなに所構わず喋っていいのかな。

「たっだいまーっと。あー疲れた楽しかった」

「美結さんはすごい良かったけど、一番はやっぱり五番目の男の人だつて。なによりダンディだったし」

それは良い案だ。しかし散歩好きだなこいつは。

「雪がー降ればーいいーのーにー」

「それ何て歌？」

「なんだったっけ、忘れた。でもたしか春の歌だったはず」

雪なのに春だなんて変なの。なんて武志に抱えられパーカーの首元から顔だけ出しながらつぶやく。これは武志の考案で私をカイロ代わりとして、私も暖かく過ごせるものである。しかしこれにはひとつだけ欠点があった。それは……

「わー！ お母さん見て、ネコちゃん可愛いー！ お兄ちゃん、触ってもいい？」

「いいよ、どうぞ」「ニヤーン」

そう道行く人々の注目となって何度も立ち止まっている。ネコを服の中に入れて歩いてるだけでも目立つだろうに、更に飼い主がなかなかのイケメンときた。妙な相乗効果が生まれてしまったものだ。早めに家を出ておいて正解だったかもしれない。

「ふーこりゃキリがないな。よしユキ逃げるぞ」

そう言う武志は私を抱えたまま軽快に走り出した。冷たい風を切り抜けるが徐々に彼から伝わる鼓動は速さを増していく。ネコにはなかなか味わえないスピードで景色が流れる。通り過ぎる人たちはこそぞって振り向く。なんとも言えない爽快感を感じた。そして目的の会場が視界に入り、だんだんと大きく近づいてきた。

「はー疲れた、久しぶりに全力で走ったかも」

そう言う頬と鼻先を赤くした彼の鼓動はともリズミカルで、すっかり胸の中も暑い。そしてそんな彼と似たような様子のジョギング姿の美結が見えた。

「あ、おーい美結さーん」

彼女は大きく手を振った武志に気づき、耳からイヤホンを取って、ゆっくりとこちらへ歩いてきた。

「おはようございます武志さん、もう来てたんですか！ ユキちゃんも一緒に」

「おはよう、ちょっと散歩がてらにね。ってか前から思ってたけど呼び捨てでいいですよ、あと敬語も」

「それは武志さんですよ？」

そう言っただけで彼女はクスリと笑った。たしかに今のは武志が天然だ。

「たしかに……。じゃあお互い呼び捨てタメ口で、歳も同じなんだし。

ね、美結」

「う、うん」

突然の呼び捨てに驚いたのか、彼女は頬をうっすらと桃のような色にしていた。

「とうか美結も早いなだね。ジャージ姿ってことは走ってたの？」

「うん、今日一緒に出演するメンバーが豪華で緊張しただから無心で体動かしてたんだ」

彼女はまだ少し恥ずかしそうな表情を残しつつも、ぎこちないタメ口で答える。

「へー、コンクールでもあんまり緊張してる様子なかったのに。そんなに豪華なの？ なにも知らないまま来たからわかってないんだ」

「今日はすごいいよ。プロのフィギュアスケーターもいっぱいですっ

ごいよ！ 目玉は小森由香さん！」

「そうなんだ！ テレビで見たことあるー」

ほう、それは私もこの前テレビで見た、その容姿とは裏腹にゴージャスなジャンプを連発して素晴らしい演技を披露した人じゃないか。

「美結って実はすごい人だったんだね」

「うーん、この前フィギュアの学生選手権で優勝したんだ。だからオファー来ただけだよ」

彼女なりに謙遜しよとしたのかはわからないが、学生選手権で優勝してプロと同じショーに招待されたとか聞こえない。もしや彼女も武志同様、たまに天然なのか。じっくり彼女を観察していると、スタツフのよいうな男に呼ばれて行った。

「じゃあ武志くんまたショーでね。あ、中に入る時はユキちゃんしっかり隠しておいてね」

彼女はそう言いながら軽やかなランニングできれいな後ろに束ねられた黒

「そういうえば次の授業のレポートまだ書き終わってなかった。先行くわ」

「なんだよもう！ 教えろよー。あつ待ててー！」

なんで美結さんが頭に浮かんだのかわからない。確かに彼女はきれいだ。それは演技をやっている彼女がきれいなんだ、と思っていた。でも尚都に聞かれて、俺の頭の中に浮かんだのはただ笑顔の美結さんだった。いや考え過ぎか……。

——「ただいまー、あれ窓開きっぱなしだ。ユキいんのか？」

「いるよー、私もさつき帰ってきた」

「寒いから窓はちゃんと閉めとけよー」

「いま帰ってきたとこだつてば。あ、そういうえば外で美結さんに会ったよ」

「そっかー」

「ついさつきだけど。学校だったんだつて」

「そっかー」

「彼氏と仲良く帰り道の途中だった。晩御飯の食材一緒に買って帰るんだつて」

「そっかー……え」

「なにシヨック受けてるの？ やっぱ武志って美結さんのこと好きなの？」

「なんでそうなるんだよ、彼氏いたんだーっただけ」

好きなんて感情は一切ない。彼氏がいたつてことには少し驚いたかもしれないけど、それでシヨックを受けた訳ではない。だけどあまり親しくもない相手なのに彼女のことが気になる部分もある。いや親しくないからこそ、気になるだけなのかもしれない。しかし今日学校で会ったゲジゲジ虫のギャルは、親しくなかったけど、気になることなんて一つもなかった。ゲジゲジ虫の話は右耳から左耳に通り返っていた。ならなぜ美結さんのことは気になるんだろう。やっぱこれが恋つてやつなのかな？

「なに難しそうな顔してるの？」

「いやちよつと考え事……んー」

「武志バカなのによく考え事するよね」

「うるせ、バカでも考える事くらいあるわ、てかそこそこ頭良いわ」でも確かに少し考えすぎたかもしれない。考えたつてどうにもならないならおいておこう。そうしよう。

——アイスショーから——

気持ちのいい日曜の朝。日が昇ってから時間は経つけど、武志はもろんまだ起きない。私ももう少し寝るか、昨日の晩はちよつと夜更かしすぎた。

そうしてうとうとしているといつの間にか武志が起きていた。

「ユキーまだ寝てんのか？ ご飯置いとくぞー」

さてご飯だと言うのなら起きよう。武志はもうご飯を食べたみたいだ。カプチーノでも飲んだらストレッチをするのだと思っていた、しかし彼は姿見の前でしかめつ面をしていた。

「んー違うかなー。なーユキどつちがいい？」

正直どつちでもいい。だけど珍しいな武志が服で迷うなんて。普段なら少し考えたフリをしてジーパンにパーカーのお決まりなのに。今日はジャケットなんて掘り出してきている。むしろ壁にかかっているスーツが気になって仕方ない。

「美結さんに会うからつて気合い入れすぎじゃないの武志」

「当たり前じゃん、美女相手には正装でも良いくらいだよ」なんて調子のいいこと言ってるけど凶星なんだろうどうせ。

「あーやっぱやめた。パーカーでいいや面倒くさい」

あらやめちゃった。ジャケットも似合ってたのに。せめてヨレヨレのパーカーはやめときなよ、と助言しとく。

「ちよつと早いけどもう行くか。天気もいいことだし散歩でもして時間潰しとこう」

「嘔むのナシって言ったじゃん！」

「だって起きないんだもん。早く朝ご飯して」

「まったくもう……。つてかまだ六時じゃん！」

「いやーそろそろお腹空いてきたから」

と朝はこんな感じだ。いつものユキとのやり取りをして、顔洗って着替えて、朝ご飯食べたら学校の時間までカプチーノで飲んでストレッツしながらゆっくりする。

「じゃあ行ってくるわ。夕方前には帰るから」

そうして学校に着いたらいつも決まったベンチで一息つく。

「うえーい、武志おはよー」

このいかにも大学生らしい挨拶をしてるのは同じゼミの山永尚都やまながしやうと。顔も喋り方もチャライ男だけど、中身は意外と純粋な男の子。

「おはよーチャラ男くん」

「武志にだけは言われたくない！ 色んな女の子弄んでひどい男！」

次はサキちゃんが怒ってるらしいよ？」

「向こうがしつこく誘って来るからちよつと遊んであげたのに、ひどい言われよう。これだから女って苦手なんだよ」

「女がダメなら、そろそろ俺にしとかない？ 武志……」

「やめるお前が言ったらまじできもい」

キーンコーンコーン

「やべチャイム鳴ったじゃん、武志同じ授業だろー行くぞー」

「先行つてて、もうちょいゆっくりしてから行く」

「お前いつつもそう言っ授業出ないじゃん！ 提出あるからこいよー」

こんな感じで学校では終始ゆっくりしている。気分がのらないことが多い。それに人が多いとこつて好きじゃないし、誰もいないとこでカプチーノ飲んでるのが至福のひと時である。しかしこんな風に気分のいい時こそ面倒くさいことがあつたりする。

「あのーこの学生さんですか？」

いかにも女の子つて感じの子が話しかけてきた。俺の目の前で目をぱち

ぱちしながら、ゲジゲジ虫みたいな長い人工まつげをはばたかせる。

「あ、はいそうですけど」

「あの私この学生じゃないんですけど、友達に会いに来たんですよ。でもその友達がどうしても授業に出なくちゃいけないからつて、放つていかれてー」

「そうなんですか、それは大変ですね」

「それでー、友達が授業終わるまで暇だからー話し相手になつてくれる人いかなー、なんて思つたりしてー」

口を動かすのも面倒なほど興味もないけど、優しい俺は快く相手をすることにした――

――キーンコーンコーン

「じゃあ武志くんまた連絡するね！ 日曜のデート楽しみー」

すごいな、もう俺の名前覚えてるじゃん。すごくテキストに会話してたら、俺は名前も知らない相手と日曜にデートすることになったらしい。

「おーい武志くん？ 誰かな今の可愛らしいギャルは？ 授業も出ないで何をしてたのか、お兄さんに説明しなさい」

「お、尚都おつかれ。提出やつてくれた？」

「いや今日なかったわ、来週つぽいよ。つて違う、誰ださっきのぴちぴちギャルは、デートするのか」

「知らない。勝手に横に座つて勝手に喋つてた。怖いねー」

「ほんとお前はモテるよなー。で行くのデート？」

「行くわけないじゃん、面倒くさい。それに日曜つて予定あるし」

「あーまたこんな外道イケメンのせいで涙を流す美女がまた一人……」

「どこが美女なんだか、ただのゲジゲジじゃん」

「なんで虫なんだよ。つてかお前のタイプつてどんななの？ まとも

に彼女すら作つたことないなんて、やつぱり俺のこと……」

「ほんとやめて。そーねー、タイプねー……あ」

ふと頭の中に浮かんだのは、笑顔の美結さんだった。

「いま誰か浮かんだでしょ？ だれだれ気になる、あの武志のタイプつて誰？」

「日曜日！ 楽しみにしててくださいねー！」
はい、それはとてもとても。しかしそう言えはフィギュアスケートのことあまり知らないな。ジャンプくらいしか見どころがわからないから、帰ったらご飯食べながらちよつと調べてみるか。そうしてまた考え事をしながら帰ると、ネコに説教をされた。

「ただいまー」

「おかえり、お腹空いた早くご飯」

「あ……ユキの分忘れてた」

「なんで自分の弁当は買ったって私の忘れるの」

ごもつとも。そう指摘されて、美結さんとばったり会って日曜に招待されたショーのことを考えていたら自分の弁当しか買えなかったと言いつする。

「またあの美少女か。先週の日曜日に美少女と会ってから、なんだかぼーつとして情けない。恋するのは勝手だけど、その恋のおかげで飢死にするなんて嫌だから早くご飯を買ってきなさい」

「いや俺が恋なんてするわけじゃないじゃん」

「恋だろが愛だろがなんでもいいから早くご飯を買ってこい」

「はい、すぐに行って参ります」

——そして急いでご飯を買ってきて息を切らしながらチキン南蛮を食べていた。そうだ、と思い出しおもむろにスマホでフィギュアスケートを調べる。ほう、なんか色々あって難しいな。たしか美結さんショーって言うってたよな、アイスショーってやつかな？ うーん文字読んでても全くわからん。動画でも見てみるか。なんかいっばい出てきた、どれを見ていいのかわからない。あ、これ色んな人をまとめたやつか。ぼちつと。——音楽が流れだし、外国の人が優雅に滑りだした。

「ふーん、みんな上手だね。たしかにバレエに似てる所も多いたいだな」

どうもあまり興味が持てず弁当をばくばくと食べていた。するとユキが寄って来てスマートフォンを覗き込み言う。

「これあの美少女じゃないの？」

あの美少女？ そんな可愛い選手なんかいたっけ？ と思って画面を見ると、そこには美結さんが写っていた。

「うっそ、有名人だったの？」

彼女の演技はやっぱり不思議な魅力がある。フィギュアスケートに関しては素人だし、なにが上手いとかわからない。だけど見ていて華があって、きれいだと思わせてくれる。

「きれいだねあの美少女」

「きれいだなー。てかネコから見てもわかるのか」

「本当にきれいなものにネコとか人間とか関係ないよ。今度観に行くんでしょ？」

「うん、そのために予習でもしとこかなって。ユキも一緒に行く予定だよ」

「え、初耳」「うん、初言い」

勝手に決めるなどか文句を言われるのかと思いきや、彼女の演技を間近で見ると少し楽しみにしているみたいで良かった。ネコに楽しみしてもらえる演技ってすごいな、美結さん。

「さ、明日も授業あるし寝るか」

「最近ダンスの練習してないね。あのコンクール以来」

「俺は基本的に公演のヘルプとか、予定入ってないと練習とかしないの、天才だから」

ふーん。つとユキに冷めた目で見られる。実は来月の年明けにあるんだけどね。まだまだ時間あるからいいや。じゃあ明日起こしてね。囁むのはナシで

——ご主人の日常——

「ニヤー……。ニヤー……。」 ガブツ

「いってー！」

「あ、やっど起きた」

いだ。イケメン紳士ネコとお似合いというか、とても可憐で可愛い女の子だった。飼い主見つかってよかったね、と武志にネコっぽく鳴こうとしたら彼の顔はわかりやすく驚いた表情を造っていた。

「え……日吉美結……さん？」

「あれ？ あ、可愛い鼻歌の人だ！」

なんだ知り合いか？ 可愛い鼻歌ってなことだろうか。

「え、このイケメンネコの飼い主さんって美結さんだったのか」

「そうなんですよー、珍しい鳥を見つけて上を向いて歩いてたら怖そうなドーベルマンの尻尾踏んじやって……それですごい追いかけられて必死で逃げてたら迷子になっちゃって……」

「それは大変でしたね……ドーベルマンの尻尾を……」

「というかなんで私の名前知ってるんですか？」

「あのコンクールで名前呼ばれてるのを聞いて、その演技がすごい印象的で、覚えてました」

「そうだったんですか、ありがとうございます。鼻歌さんもお名前教えてくださいますよ、私だけ知らないなんてずるいですよー」

天然なのかわからないが、彼女の会話の仕方は手慣れたようにも感じる。そして武志は照れ臭そうに自己紹介してる。どうやら二人は同い年で通ってる大学も家も近いみたいだ。彼女も大学の為に引っ越してきて一人暮らしでそれに方向音痴が相まつてるような話をしてる。

「あ、そうだ私ね来週の日曜に、この近くのスケート場でフィギュアスケートのショーやるんですよよかったら見に来てください。これ招待券」

「ほんとうですか、是非いきます！ ありがとうございます」

「お昼の一時に開演で、私の出番は三番目なんで遅れないでくださいね。クウちゃんのことありがとうございます。それじゃまたショーの時に」

そう言いながら彼女はまた愛らしい小走りで行って行った。武志は彼女が走り去った方向を、遠距離恋愛の相手が乗った別れの列車を見送るように遠く見ている。

—— 予習 ——

ドンガラガッシャー！ —— 武志は料理がほとんどできない。一人暮らしを始めてから上達した方だと言うけど、それは暴れるようにしか見えない。

「いつてー。またぐちゃぐちゃだ。久しぶりに料理でもしようと思っただに……」

「武志、遊んでないで早くご飯買ってきてよ。昼に買ってきてくれた骨みたいなやつ、犬用で食べられないんだけど」

「え、まじか。ついでに俺のご飯も買ってくるか」と言っただけで汚れたエプロンをつけたまま出ていった——

やっぱ料理は苦手だ、慣れないことはするもんじゃないな。って言い続けてたから一人暮らしを始めてからもう四年目になるうとする今でもできないのだけど。この時間ならまだスーパーは開いてるし行くか。スーパーの方が安いことだし。

「あ、なにしてるんですか、武志さんっ」

「おっふ。美結さん」

不意な彼女との遭遇に思わず変な声が出た。前に運動公園で会ったのが日曜で、今日が水曜だから三日ぶりか？ よく会うな。

「おっす武志さん、食材でも買ったんですか？」

そう言う彼女は大きめのスーパーの袋を握っている。

「食材とか弁当を買いました」

「おっかしいですね、そんな格好でお弁当だなんて」

そう言う彼女は可愛い笑みを見せてくれた。そして自分がどろどろのエプロン着たままのことに気づくのに少し時間がかかった。

「あれ、また照れてる」

恥ずかしさで言葉に詰まっていると、彼女は急いでいるからと足早に去って行った。

「とにかく大きい公園で、野球場とかサッカー場とか色々あるところ。日曜ならなんかのスポーツの試合とかしてるかもしれない」

それはちょっと楽しみだと思いつつながら気持ちいい速さで歩き続ける。すると後ろから気配がしたので振り返った。きりつとした顔つきでシバトラ柄の雄ネコ後ろを歩いていた。

「お、ネコちゃん。イケメンだな」

なんで武志はネコの顔の見分けがつくのかわからないが、たしかにネコの中ではイケメンだ。金のトラ柄で、金の吸い込まれるような眼光。その雰囲気はまるで英国紳士だった。

「ありがとうございます。ところで私の飼い主さん見かけませんでしたか？ 若い女の人の人なんですけど」

「いやー、いま歩いてて女の人は見てないな」

なんでだよ。なんでこのネコは普通に話しかけてんだよ。そしてなんで武志も普通に返事してるんだよ。お互い自然すぎるだろ、おかしい。

「そうですか、ありがとうございます。やっぱり驚かないんですねネコが話しかけても」

「いやいや、けっこう驚いてますよ。あまりに自然に話しかけられたもんだから、びつくりして普通に答えちゃいましたた」

「驚かしたならすみません。さつきから後ろを歩いてたんですが、普通にそちらの美人さんと話してたようなんです、慣れてるのかと」

「え？ 美人って？ 女の人はいないですけど？」

おいバカ武志

「お二人で仲良くお散歩ですか？」

「そうなんですよ、運動公園でも行こうかと」

「それは奇遇ですね、私も飼い主さんとそこまで向かってたんですよ。けど途中ではぐれちゃって」

「迷子ってことですか？ まるで童謡みたいですね。ワンワンワワンみたいなの」

「いえ、迷子なのは僕の飼い主さんの方です。おっちょこちよいで。

それにその童謡って、ニャンニャンとワンワンじゃ言葉通じないよね、っていつも思ってたんです」

「あ、なんか色々すみません」

たしかにワンワンとニャンニャンじゃ英語と日本語で会話しようとしてるみたいなものだよなと思つて聞いていた。

「とても仲良しに見えますね、どのくらい一緒にいるんですか？ 美人さん」

ここに女なのは私しかいないのでこれは私に話しかけてるのは明確なのだ、ここで軽々しく返事すると自意識過剰と思われるかもしれないのでまずはとぼける。

「え？ 私のことですか？」

「ええ、もちろんあなたしかいませんよ。失礼ですがお名前は？ あ、私はクウといいます」

「やだ、お世辞でもありがとうございます。ユキって名前ではばれてます、クウさん」

「いえお世辞なんかじゃありませんよ、いい名前ですネ飼い主さん。」

「俺は武志ついでいます。いいでしょ、俺の元カノの名前からとったんですよ」

「元カノの名前……」

「やっぱりそう思いますよねクウさんも」

「え？ なんの話？」

武志って時々天然なところがあるのだけど、その天然さが突き抜けることが多い。誰だって元カノの名前つけられたら嫌だろ、ネコだってそうなんだよ。と言おうとしたところで目的の場所に着いた。

「おー、着いたー！ 着く前から聞こえてたけどやっぱり試合やってんじゃない！ これはサッカーかな？」

さつきの突つ込みなんて忘れて、サッカー見てみたいなどとそわそわしてたら、女の人がちちらにとでも愛らしい小走りで寄ってきた。

「クウちゃん！ よかった見つけた！」

「あ、ニャー！ 私のご主人なので失礼します」

紳士は小声でそう言った。どうやらイケメン紳士ネコの飼い主さんみた

「お、おう……言ったよ」

「うおおおすげー、めっちゃ標準語じゃん！」

「うん……」

やっぱりこういう反応になる。ネコが人の言葉を話せば驚くのは想定内だ。なんだから彼の場合は驚くというより、喜んでるように見えるが。

「いやーびつくりびつくり。そんななら最初から喋ってくれよー。」

「じゃあご飯どうする？」

これは想定外。ご飯の相談をする前にもっと他にやる事があるだろう。動画を撮ってツイッターに投稿するとか、手当たり次第ラインで友達に話すとか。

「マグロ味のかりかりしたやつがいい」

そう思いながらもしつかり答えた。言いたいことはちゃんと言わないとね。

「おーわかったわかった、喋れるんからご飯で悩むこともないし楽だな。あ、ていうか聞いてよ。今日のコンクール、優秀賞もらったんだ」

優秀賞とやらが何かわからないけど、すごい嬉しそうな顔をしているから良いことだったんだろう。それにしてもネコと話すことに抵抗はないのかな。

「ネコが話してるのに慣れるの早いんだね」

「いや慣れるもなにも、まだあんまり理解できてないし現実味がない。これは夢だと思ってる」

「あ、そうですか……」

「いや慣れるもなにも、まだあんまり理解できてないし現実味がない。」

「あ、そうですか……」

「あ、そうですか……」

——迷子の迷子の飼い主さん——

コンクールから一週間。今日は練習もなにもないらしく、武志は朝からごろごろしている。

「ウィーウィツシユアーメリークリスマス アンド ハッピーニューニヤー。あーひまだー」

呪文みたいに同じことをずっと言ってる。ご飯を食べながら暇だとか言うのはどうかと思う。

「暇ならダンスの練習でもしとけばいいじゃん」

「たまには休みも必要だよー。それに先週のコンクールで優秀賞も取ったことだしいいでしょ」

優秀賞とやらを取れば練習はしなくていいものなのか。そのあたりはよくわからない。

「武志のやつてるダンスってどうなのなの？」

「おー、興味ある？ 教えてほしい？」

暇そうだから話し相手になってやろうかと思っただけなのに、うざい奴。

「仕方ないなー、教えてやるよー。モダンダンスって名前なんだけど

——

案の定うんたらかんたら話しはじめた。人間というのは家族、趣味もしくは恋愛の話でも振っておけば話し続けるから楽だ。

「——ってな感じでけっこう奥深いんだよ。幅も広いしね、やりがいあるよー。それにさ——あ、散歩行こっか」

こいつは時々話が突然すぎる。思いつきで行動しようとするのが多すぎる。その思いつきで拾われた私が言うんだから間違いない。

「おーし行くぞ」

「おーし行くぞ」

「おーし行くぞ」

「おーし行くぞ」

「おーし行くぞ」

「おーし行くぞ」

「おーし行くぞ」

「おーし行くぞ」

「おーし行くぞ」

「おーし行くぞ」

「おーし行くぞ」

「おーし行くぞ」

「おーし行くぞ」

「おーし行くぞ」

いね」

「いえいえ、順番くらいなんでもいいですよ」

そうは言うけど、またどこからともなく聞こえてくる課題曲に緊張しなくちゃならないと思うと気が滅入る。

「はあ、早く帰りたい……」

——また待ち始めて三十分。いい加減に待ち疲れてきた。しかし不思議と緊張はしてない。なぜならあの子——日吉美結さんの演技が何回も頭の中で再生されるから。

「そうか、ここは指先を意識しないと緊迫感が薄れるな」

そんな風にブツブツ言いながら頭の中の彼女を臨時講師にして、振り付けに修正を加えていた。

「田中さん、それでは次なんて準備お願いします」

いよいよ順番が回ってきた。緊張はしてない、むしろ直前で発見した修正点をうまくできるか試したくてもうずうずしてる。ありがとう臨時講師。

「それでは最後の方どうぞ」

じゃ、俺も魅せますか——

——ネコの気持ち——

「——完全に迷った」

見たこともない風景の中で、私はお尻は地面につけ、揃えた前足に尻尾を巻きつけていた。

「武志の家に戻るにも来た道すら見失った。どうする」

そう途方に暮れながらも、とりあえず歩いてみる。なんだか大きな建物が目の前を走り抜けていく車たちの向こう側にちらちらと見える。何気なしにそこに行こうと横断歩道を渡ろうとした、その時——

「おー、なにしてんの?」

またか、ネコが横断歩道を渡るのがそんなにも珍しいのか。面倒くさいので無視して通り過ぎようとしたら、まさか抱き上げられた。

「どこ行くんだよ。ご主人様を無視するんじゃないよ」と

武志だった。歩き疲れていたのと、迷子という不安感から解放されたことと思わず臍抜けた声で鳴いた。

「ニャーア」

「なんだ、俺に会いに来たのか可愛いやつめー。ほれほれー」

私の両脇に手を入れ顔の前に持ち上げ、お腹に顔をうずめてくる。くすぐったい。

「フアーン！」

車のクラクションが早く渡れと武志を急かす。

「すみませんすみませんと、お腹空いたし帰るか」

そう言つて華奢な肩に、私をタオルみたにかけて歩きます。

「んー、ご飯どうしようかなー。今日は祝いつてことでいいもん食べよつ。ユキもあのカツオ味のネコ缶な！」

「またカツオ?——……」

なんだかばーつとしていいのか、ドジなのか、可愛く言うとおつちよこちよいなのか。……また喋っちゃった。しかも今度は自分の飼い主の耳元で。

「……え、いや? カツオ味……」

「……嫌いじゃないけど食べ過ぎたら飽きるよ、ネコも……」

「そっか……じゃあどうしようか……な……」

なんなんだろこの状況は……。思わず喋ったネコの私とそれに返事する人間。

「うん、やつば喋ってるよね……」

「あ、はい……」

「だよね……喋るんだネコつて。知らなかった……」

「実はそうなんだよね……」

——どうしようこの不思議な状況。

「……うおー! すっげー! ネコつて喋るんだ! すげー! 喋って! もっかい喋って!」

「え、え、」

「うおー! 『え』 って言ったよ! 『え』 って!」

レエより飛んだり跳ねたりの表現は激しかったりそうじゃなかったり。決定的に違うのは地面に手をついたり、寝転がったりするところかな、バレエじゃ考えられないよね。つてな訳で久しぶりにコンクールに出てみようとしたんだけど。すっげー緊張してきた。これでも実力はなかなかあると自覚してるんだけど、普段は劇団のヘルプに行ったりレッスン教室のお手伝いくらいしかしてないから、なんかいつもと違う雰囲気でも緊張してきた。大学を出たらダンスを仕事にしたいと思ってるから今の内に賞とか取って実績は残しておきたいから気合は入ってる。ああ、でも緊張し過ぎて帰りたい、帰ってユキのお腹スリスリしたい……。

「田中さん、あと二人で順番です」

「はい」

そう言われて冷たい廊下から舞台の袖に行くところには、女の人が一。俺のひとつ前の人かな。舞台には演技中の男の人。何度も舞台から流れる課題曲が終わるたびに緊張が高まっていく。最初に来た頃より照明が暗くなっているような錯覚に陥る。呼吸はいつも通りなのに心臓の鼓動だけが先走る。

「フーンフーフーン——あ」

リラックスでもしようと思つて、何気なく課題曲を鼻歌で歌ったら俺の前の女の人もちよつと鼻歌を歌った。

「ふふっ、すいません、ハモっちゃいましたね」

きれいな黒髪をなびかせて、少女漫画のような顔立ちをした彼女が微笑みながらそう言う。俺は少し緊張混じりでぎこちなくにこつと微笑んでおいた。

「緊張、してますか？」

と、尋ねられた。当たり前だと思つて少し間を空けて答えた。

「ほんの少しだけ。コンクールは久しぶりなんで」

「それで鼻歌の音が震えてたんですか？ ふふっ 胸じゃなくてお腹で呼吸すると少し緊張ほぐれますよ」

「え、震えてた？ 恥ずかしいな……」

「可愛い鼻歌でしたよ、イケメンさん」

普段なら耳に残らない言葉なんだけど、この少しの緊張もあつてか、そ

の言葉に恥ずかしさを感じた。

「からかわないで下さいよ……。すごいリラックスしてるんですね、慣れてるんですか？」

「いえいえ、私も緊張しますよ。ダンスのコンクールって初めてで」「初めて？ とてもそうには見えませんね。ダンスの、つてことは他にになにかしてるんですか？」

「はい、スケートをやってます。ちよつと違う世界も経験してみようかと思つて」

「スピードスケート？」

話していると緊張も解けてきたので少しふざけてみると、

「そうそうダンスの柔軟性を取り入れよう……つて違いますよ！ フィギュアスケートですよ！ スピードスケートって違いすぎるでしょうが。」

その容姿とは裏腹に意外とノリよく返してくれた。可愛くておもしろいつていいね。

——その時、審査員が少し張った声で

「えー、それでは次の方、日吉美結さん、どうぞ」

「はい」

どうやら彼女の順番がきたみたいだ。彼女は元気のある返事をして舞台へと向かった。そして曲がかかり演技がはじまる。

「……なんだか不思議な魅力あるな」

モダンダンスの経験がないにしては上手い。いや、上手いより「きれい」という言葉のほうがいい。技術とかではなくて、表現力がいい。この課題曲にこんな表現の仕方があったのか、と感心する。

「なんだか全部きれいな人だな」

思わず口に出してしまった。そうして彼女に見惚れていると、

「あー、田中武志さん。少しこちらによろしいですか？」

突然肩を叩かれ、振り向くとコンクールスタッフがいた。何だろと思ひ、言われるがままついて行く。

「いや、すいません。他の田中さんと順番間違えてたみたいで。田中武志さんは一番最後なんで、よろしくお願いします。ほんとごめんなさ

しぶりだな」

一人でブツブツ言いながらも日課のストレッチをしている。武志に飼われはじめて一週間、久しぶりに外でも出てみようと思った。

「じゃあ行ってくるからなー」

ガチャ。さて、私もでかけよう。漫画やCDがいっぱい詰められた本棚に飛び乗り、そこから窓をカリカリと爪で開ける。窓に鍵もしないなんて不用心なものだ。と言っても窓の鍵くらい、ネコでも開けられるものだけだ。

「さてどこに行こう」

と、突然で驚いたかもしれないが、今の声は私、ユキである。お察しの通りネコも喋れるということ。普段鳴いている「にゃー」などは、いわゆるネコ語で、ほとんどのネコは人間の言葉も話せるものだったりする。え？じゃあなんで話さないのかって？それには色々となネコの間での事情がある。それにいきなりネコが「今日はごつつ天気ええなあ」とか話しかけてきたらびっくりして開いた口が塞がらないだろう。

さてそんな細かい話は置いて、寒いながらも天気はいいのでどこに行こう。どこに行こうか悩んでいると少し遠めに武志の姿が見えた。

「どこに行くのかついて行ってみよう」

普段なにをしているのかも気になるし、コンクールとやらも見てみよう。そう思っただけで、イヤホンをつけながら軽快に走る武志の後ろを追っていた。

——「それにしても武志、人間のクセに意外と走るペース早いな。ダメだ、疲れてきた」

そう思っただけで、少しゆっくりと歩きながら横断歩道を渡っていると、

「なにこれ、ネコが横断歩道渡ってるよ！チヨウかわいい！」

「ほんとだ！ネコがちゃんと青信号で渡ってるよ！」

「てか野良ネコかな？首輪もつけてないし」

「えーでも、毛とかチヨウきれいじゃない？飼った猫で迷子なんじゃない？」

「僕ちゃん迷子でちゅかー？」

「てか写メ撮ろ！写メ！ミキそのまま捕まえて！」

女子高生に捕まった。ネコだつて横断歩道くらい渡る、青信号で渡るの常識だ。それに私は女で人間の歳でいうとあんたらよりそこそこの年上だ。それにパシヤパシヤ眩しい。朝っぱらからフラッシュをつける意味があるのか、ないよ。

「はあ。あ、武志も見失ったし——あつ」

「えっ？サユリなんか言った？」

しまった、思わず心の声ももれてしまった……。

「なんも言っていないよ？てかミキが武志とかなんと言ってたじゃん」

「えーもうやめてよー！なんで武志くんの話なんか私がいきなりするの(照)」

「どうせまた武志くんスキスキ話でしょー(笑)てか武志くんのコンクール何時からだっただけ？」

「あつ、えーとお、十時からだ！やばい急がなきゃ！」

「もうすぐじゃん！急ごつ！ミキ！」

——ふう、危なかった。全くもって女子高生は自由な人種だ、けどその自由さに救われた。……ん？武志くんのコンクール？

——ピーチレディ——

今日は久しぶりのコンクール。なんのコンクールかって？ダンスのコンクールだよ。なんのダンスかって？モダンダンスだよ。

実は小さい頃からバレエをやってたんだ。姉ちゃんが四人いてね、みんなバレエやってたもんだからその影響でね。これでも昔はけっこう注目集めてたんだよ、新聞に載ったりすることもあったし。でもどんなに上手に踊れても身長が伸びなかった。身長がないと見栄えがしないからプロは目指せなかった。そうして自分の進む道を見失ってる時に、バレエ仲間勧められてモダンダンスをずっとやってるんだ。モダンダンスってのは、バレエと少し違ってもっと自由に創作的なものなんだ。バ

いけるものだな。寝る前には見たくないが。二つの針が揃って真上を指した頃、彼はおもむろに電気を消してベッドに入った。

「おい、もう寝るぞー。明日も学校だからな。なんせ単位がやばい」
 まったく人間はおかしなものだな。夜に寝る人間もいれば、朝に寝る人間もいる。いやネコだってみんながみんな、夜に活動するのかわいければそうじゃない。だけど、夜に活動するネコはみんな朝には寝ている。しかし人間とは不思議なもので、ついこの前まで朝に寝て夜は活動していた人間が、朝に起きて夜に寝るというまったく逆の生活を送ったりするのだ。ネコよりも気ままな生き物ではないだろうか。

「スースー」

寝つきのいい奴だ、と思いつながら部屋をうろろしたりご飯を食べたりしていた。おや、これはさつき気になってしかたなかったクローゼットを覗くチャンスではないだろうか。どうしてもあの匂いが気になってしかたない。そう思つてクローゼットへと近づく。

「ニヤーン」

しかしどうしたものか。いかんせん開け方がわからない。まずは押してみたものの開かない。たしかに押して開くクローゼットなんて不便でしようがない。次に引こうとするが……ネコに引ける訳がない。そこで少し乱雑な部屋に置かれたビニールの紐を見つめる。これをクローゼットの取っ手に引つ掛けて口で引つ張ろうと思う。え？ そんなうまいこと行かかって？ それが行くんだな。颯爽と紐を取っ手かけ、口で引つ張る。ズーツと鈍い音を立てて扉が開く。

「ニヤニヤ？」

さすがに暗すぎてなにも見えない。でもこの感じは服だろうか。触れて確かめてみようと思つたところで――

「おいバカネコ」

「フニヤッ！？」

「フニヤッ！？ じゃねーよ。ダメだって言つただろー」

「ニヤァーン」

「なに可愛く鳴いてんの、小悪魔か。ダメなものはダメ。早く寝ろー。ささっ小便いこつと。てかユキのトイレも早く作らなきゃな」

なんともいいタイミングで起きてくるやつである。そのへんでトイレしてやるうか。それに私よりよっぽど小悪魔っぽい顔立ちしたお前に言われたくない。クローゼットの中身はまた今度とするか。

—— 迷子によろしく ——

田中武志に飼われはじめて一週間。ペットもなかなか悪くない。まず朝は武志を起こしに行く。鳴いたり、顔を舐めるくらいじゃなかなか起きない。手っ取り早く鼻か耳を噛むのが一番いい。起きたら次はご飯。だいたいネコ缶だけど、たまに焼き鮭をフレークにして白ご飯と混ぜたものを出してくれる。私としては鮭はそのまま齧り付きたい。けどご飯を貰えるだけ有難いから、おいしく頂く。そして私のがんびりと、朝ごはんを食べ終わる頃に、武志は学校へと向かう。いつも夜まで帰つてこないからお昼ご飯にネコ缶を置いていく。そして帰ってきたら一緒に晩ごはん。平日はだいたいこんな感じだ。

しかし今は日曜日の朝。たまにはゆっくり寝かしてやるか、と思つて背伸びを思いっきりして爪とぎでもしようかとした所で、

「ふあー。ねむてーさみーおはよー」

天然パーマと寝癖が素晴らしい青年が起きてきた。私が起こさなくても起きれるんだ。手早く買い置きしてたコンビニおにぎりを食べるなり、さくさくと何やら用意をしている。

「ニヤァー？」

どこに行くのか問いかけてみると、

「今日はコンクールがあるから出かける。お昼過ぎには帰つてこれからご飯は帰つてからな」

コンクールとは何だろうか？ そういえば平日も夜までなにかしているみたいだし、休日でもお昼や夕方にも同じ鞆をもつてどこかに出かけていた。

「あー、ちょっとだけ緊張してきたかも。そーいやコンクールって久

ムソースカルボラーナ、はいお前は、じゃじゃーん！ ちよつとお高めのネコ缶かつお味！ 歓迎祝いつてことで。はい、どーぞ」

「……」

なんなんだろう。突っ込み所が多い気がする。まずは窓の内側を見るなんて、とても久しぶりな気がする。丸い蛍光灯なんか初めて見たかもしれない。テレビ、昔におばあさんの家の窓の外から盗み見してた頃とはすぐく形が変わったんだな。大きくて薄いし色もきれい。とは言ってもネコの目からすると蛍光灯もテレビも、ちかちか点滅して見える。え？ なんてかかって？ 難しい言葉を使うと、フリッカー融合頻度という目の能力が人間と違うから。蛍光灯やテレビは実は高速で点滅している、人間の目では光り続けているように見えているらしい。でもネコの目はその高速の点滅を捉えることができて、ちかちかと見えるのだ。逆にあまりにのろのろと動くものは止まっているように見えることもあるんだよ。ちなみにハエなんかになると――。

違うそうじゃない、テレビの形が変わったことを今更知ったネコが、なんでフリッカー融合頻度の概説をしてるんだ。なぜなのだろう、なぜいきなり暖かくて賑やかな部屋の中にいるのだろう。この若い男はなんのためらいもなく私をこの部屋に連れてきた。まるでドーナツでも買って帰るくらいに。こんな人間は初めてだ。今まで何人か私を飼おうとした人間はいた。でも結局は親に反対されたり、迷った拳句に家の前で放されたりだった。だけど彼は私を持ち上げてメスであることを確認して、暖かいコートの中に私を抱きかかえ、コンビニで「かつお味が食べたそうな顔してる、間違いない」とか言いながら本日四回目のかつお味を買って、風呂とドライヤーとか言う拷問して、自己紹介を始めた。

「はい、はじめまして。俺は田中武志！ 大学四回生の二十二歳！ これからよろしくー」はい、吾輩は猫である。名前まだない。やつぱり飼う気満々だ、これからよろしく、らしい。少し変わった人間ということでは火を見るよりも明らかなことだ。ネコに向かって元氣よく挨拶している人間なんて、変人か変人しかいない。「ささー食べ食べて食べて。見ての通り一人暮らしだから遠慮なくね」遠慮は全くしていないが、さつきも言ったように、目の前のちよつとお高めのかつお味は本日四回目。お腹

すいたから食べるけど。

「んー、名前どうしよう。体は真っ黒だろ、目はきれいな青、すべすべな毛並みだし……クレオパトラかな？」

私は特に名前なんかにこだわる気は一切ない。でもクレオパトラだけは、違うと言いつける。そんな気持ちで鳴く。

「ニャニャ……」

「違うか」どうにか通じた。良かった。

「クレオパトラが違うならユキしかないな。決まり」

なんて安易で短絡的なのだろうか。理由なんて聞かなくてもわかる。窓の外の景色でしかない。

「ちなみに俺の元カノの名前な」――やだ怖い。

――小さな冒険――

「――でさ、俺は地元から出て、こっちの大学きたんだ。こっち来たからって何も変わらないんだけど、一人暮らしはいい経験になってるよ」相変わらずネコ相手によく喋るな。友達いないのかな。彼の話より鼻先のクローゼットから匂う独特の匂いが気になる。人間の汗と、皮のようなもののが混じった匂い。好奇心に駆られて、どうにか開けられないかツメをたててみる。

「おいユキ、そこはダメー」急な大声で体がびくつと硬直する。

「ここは開けたらダメ。大事ものを閉まってるからな」

そこまで言われたらとても気になる。彼がいない時にでもゆっくり探ってみよう。今は大人しくご飯でも食べよう。……かつお味飽きたな。

「どーしたユキ？ お腹いいっぱいなのか？ ほれーお高いかつおだぞー」

この気を使えないイケメンはほつといて少しゆっくりしよう。あーこんなふかふかのソファに寝転がれるなんて、雨風に吹かれて生まれた野良ネコには信じられない。テレビはちかちか眩しいけど、慣れれば意外と

猫を主人公とする物語 ―踊るように恋―

桂 聖竜

(丸田ゼミ)

― 出合い ―

少し透き通った雪が、淀んだ空から落ち続けて、足元がうっすらと白くになった十二月の小さな公園で、私はドーナツみたいに拾われた。とにかく寒くてひもじくて、通りゆく人間に鳴き掛けるけど、皆ちよっと頭を撫でて体を触って立ち去るだけ。だけど中には何か食べ物してくれる人間もいる。だから声が枯れない程度に鳴き続けるしかない。仕事みないなものだ。

「さっぶーい。練習で疲れた体に沁みるー」

「ニャー」

「ん？ 真つ黒猫じゃん。青い目が綺麗で目立つな」

若い男が立ち止まって話しかけてきた。薄いモンブラン色の髪の毛は、パーマを当てているのか、ふかふかでネコからしても気持ちよさそうだ。

「ニャー」私はもう一度鳴く。気持ちよさそうなモンブランが私の目の前にしゃがんだ。遠目で見てもわかったが人間の中でもきれいな顔立ちなのだろう。

「ニャーニャー」まずは頭を撫でるのだろう。とにかくお腹が空いたから、ご飯をくれるのかくれぬのか、早くしてほしい気持ちでいっぱいだ。

「よいしょっ。おー、メスカ、女の子か、女の子か？ おばさんか？ どっちだ？」

いきなり抱き上げるなんて失礼な美青年だな。手ぐらいひっかいてやろうか。というかおばさんじゃない。人間の歳でいうとまだぴちぴちの

二十三歳だから。そんな思いをのせてまた鳴いた。

「ニャー」

「よいしょーし、こんなところで寒かったら。一緒にご飯買って帰るか！」

よしきた。これで本日五食目のご飯だ。なにをくれるのかな。四食中三食も安いかつお味のネコ缶だったから、安いのでいいからせめてアジかサバ味がいいな……へ？ 帰る？

― 自己紹介 ―

「ニャー！ ニャー！ ニャー！」

「暴れるなつて！ 痛い！ こら！ ひっかくなよー」

「フシヤー！」

「うわ、めっちゃ怒ってるじゃん。雪ん中で寒かったらもうから風呂いれてやってんのにさー。まいいや、上がってご飯にしよう。風邪ひかないようにしっかり拭いてやるからなー」

「ニャー……」

「あ、面倒くさいからドライヤーでしよっ」

「ニャー？」

ブウオオオオオオオオオオ――

「ニャァァァァァァァァァ！」

「すごいびびってんじゃん……。ちよつとの我慢だからね――。よしつと、ささ、ご飯だご飯だ。えっと、俺は厚切りハム入り濃厚クリー